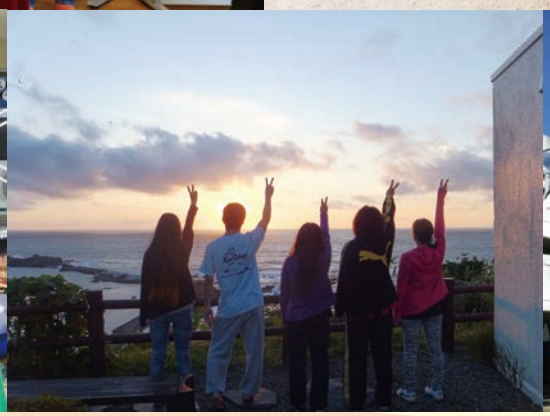
SHUKUTOKU

令和２年度

淑徳大学地域支援ボランティアセンター
活 動 報 告 書

東日本大震災復興10年 TOMOIKI企画 報告書
～できることをいまここから～



淑徳大学地域支援ボランティアセンター

巻　頭　言

本センターは、淑徳大学の全学的な地域支援ボランティア活動について、本学の建学の精神「利他共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育研究と社会貢献に資することを目的として設置されたものです。

新型コロナウイルスの影響を受け、各キャンパスの学生、教職員によるボランティア活動は中断することもある一方で、できることから、さまざまな取り組みは継続もされました。本センターでも、この取り組みが継続されることを支援するため、感染予防の手引きを作成するなどの対応を行いました。

こうした緊急事態の時期にあってこそ、教職員、学生がどのキャンパスのどの学部・学科に所属していても、淑徳大学の一員というアイデンティティを保ちながら地域支援活動、ボランティア活動を考え、行動する協議の場として、教員・職員が対等な立場で協議できる運営委員会を本センター運営では構成し、全学的な取り組みを促進させています。

本センターは、災害支援から始まったことも特徴のひとつで、東日本大震災で被災された東北の地（宮城県石巻市雄勝町）の災害支援、復興支援活動、学習支援、パネルシアター、スタディーツアーを企画しこれまで継続的かつ全学的に取り組んでまいりました。さらには、認知症問題にも取り組み、各キャンパスでは自治体と協力しサポーター養成講座にも取り組んでいます。本書から全学的な取り組み、活動内容をご理解いただくとともに、プログラムに参加した学生の成長を読み取っていただければ幸いです。

今後も、本センターは、利他共生の考えのもと「今、私たちにできることは何か」をたえず自問自答しながら地域社会の一員としても成長していくことができる、学生・教職員と地域の方々との学びのプラットホームの役割を果たしていきたいと存じます。

特に、本年度の報告書では、東日本大震災復興10年TOMOIKI企画も収録いたしました。

最後になりましたが、本学学生と教職員によるボランティア活動は、受け入れてくださる地域の皆様の許しがあってはじめて成り立つものです。ここに、ご協力いただいた地域の方々、関係機関の方々に改めて感謝を申しあげ、引き続き、皆様と「共に生きる社会の実現」に向けて、今、私たちにできることは何か、地域の方々と共に行動化できるようになる学生・教職員像を描いていけるセンター運営をめざし、令和三年度はさらに充実、発展化させるべく、地域共生の考え方もセンターに位置付ける検討をすすめる予定です。

本学の風土、文化のなかに、本センターの取り組みが溶け込み、教職員や学生における自利、利他共生の考え方と行動が日常化することにより、淑徳大学の地域共生のふくし文化がはぐくまれ、確実に築かれていくことを願い、巻頭言とさせていただきます。

淑徳大学地域支援ボランティアセンター長　山下　興一郎

目　　次

巻頭言

1．センター活動 …… 1
スタディーツアー …… 3
ボランティア活動における助成制度の創設について …… 17
感染症対策の手引き …… 31
ボランティア活動における助成制度　実績報告 …… 39
認知症サポーター養成講座 …… 45

2．各キャンパスにおける活動内容 …… 47
千葉キャンパス …… 49
千葉第二キャンパス …… 49
埼玉キャンパス …… 50
東京キャンパス …… 50

3．東日本大震災復興10年TOMOIKI企画 …… 51
学長あいさつ …… 53
特別インタビュー …… 54
特別対談 …… 57
パネルシアターキャラバンTOMOIKI企画オリジナルストーリー　他 …… 69
復興支援への取り組み報告 …… 72
淑徳大学から思いをつなぐ。つなげる。（卒業生・教員からのメッセージ） …… 92

1．センター活動

淑徳大学　被災地復興支援プログラム

第8回　スタディーツアー

被災地復興支援プログラム　　2020年度　第８回　スタディーツアー　2020年10月31日（土）

◆スタディーツアーの目的

本学では「できることをいまここから」をスローガンに、復興支援活動を続けています。

昨年度の令和元年度台風19号により千曲川が氾濫し被災した長野市長沼地区の被災状況と１年が経過した復旧・復興状況の視察を行います。長野市復興支援課主催の「デジタルスタンプラリー」に参加し、被災地のポイントをめぐり、被災地ポイントに設置されている専用サイトにて被害状況を知り、自身の目で被災地の現状を学びます。

◆スケジュール

日　程	主　な　活　動　内　容　（変更する場合があります）
10/31（土）	**07：10　【社会福祉学科学生：３名】**集合場所：東京駅新幹線南のりかえ口 北陸新幹線：JR新幹線あさま603号・長野行　**東京駅７：24発** （大宮駅から山口先生が乗車） **07：30　【歴史学科学生：３名】**集合場所：東京駅新幹線南のりかえ口 北陸新幹線：JR新幹線はくたか553号・金沢行　**東京駅７：52発** （集合場所にて成田（職員）が特急券・乗車券を配布します） 09：30　長野駅到着・全体合流 10：00　被災地ポイント視察開始　中央タクシー：小出様（026-282-7777） ・長沼支所・交流センター奥・堤防前 ・長沼農産物直売所「あぐりながぬま」 ・北部スポーツ・レクリエーションパーク 参考：「がんばろうNAGANO」長野市復興推進課主催 https://www.city.nagano.nagano.jp/soshiki/fukkousuisin/457977.html 13：00　昼食・精進料理体験 兄部坊（このこんぼう）：026-234-6677 善光寺見学・周辺散策 15：30　長野駅到着 16：18　長野駅出発（JR新幹線はくたか568号） 17：52　東京駅到着　到着後解散

◆参加費：無料

（自宅からJR東京都区間までは各自負担。東京区間から現地までの往復費と昼食代は大学で負担します。）

◆持ち物：筆記用具、スマートフォンまたはタブレット、飲み物　他（感染症防止にご協力ください。）

◆参加学生　６名

1	千葉	B71124	社会福祉学科	４年	小島　千夏	コジマ　チナツ
2	千葉	B71137	社会福祉学科	４年	吉野　栞奈	ヨシノ　カンナ
3	千葉	B71066	社会福祉学科	４年	小林　季葉	コバヤシ　ユキハ
4	東京	R18009	歴史学科	３年	伊藤　美咲	イトウ　ミサキ
5	東京	R18018	歴史学科	３年	岡村七海子	オカムラ　ナミコ
6	東京	R18039	歴史学科	３年	嶌田　陽香	シマダ　ハルカ

◆引率教職員：（教員：総合福祉学部　山口　　職員：大学地域支援ボランティアセンター　成田）

◆終了後の課題（事後学習）について

１．事前学習内容、体験、感想をレポートまとめて、メールにて提出してください。
２．提出形式：A4サイズ２枚程度　wordにて作成（写真貼り付け可）
３．表題（自由につけて構いません）・学籍番号・学部・学科　学年　氏名を記載して、提出。
４．提出期日：11月30日（月）厳守
５．提出先：淑徳大学
　　地域支援ボランティアセンター担当 成田

（レポートは一部抜粋を本学HP掲載と、淑徳大学　地域支援ボランティアセンター活動報告書に掲載します。）

長野市・千曲川氾濫

～氾濫当時と１年たった現地の復旧・復興の様子について学ぶ～

総合福祉学部　社会福祉学科　４年　小島　千夏

2019年10月12日、長野市は過去最大の台風と言われている「台風19号」の影響により千曲川の堤防が決壊し、多くの世帯が浸水被害を受けた。今回のスタディーツアーでは、実際に大きな被害を受けた被災地ポイントを視察し、１年たった現地の復旧・復興の様子や、当時の住民の避難生活の様子、ボランティア活動の様子などについて話を聞きながら学びを深めた。

１．長沼支所・交流センター奥・堤防前

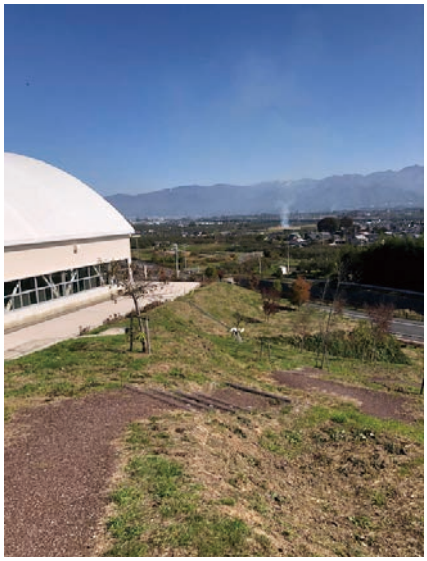
長沼支所・交流センター付近では、実際に破損した体育館や公園の遊具、流された家の屋根がそのまま残されていた。その建物の破損の仕方や家の外壁に残った水の跡から、千曲川の反乱の勢いがどれほど強いものだったのかを想像する事が出来た。長沼支所の周辺を車で視察すると、現在もなおブルーシートに覆われた家や、住めなくなった家、そして実際に家の取り壊しが行われている様子を目の当たりにした。住民の住み慣れた場所に住めなくなる悲しみや、今後の生活の不安などを想像すると、とても考えさせられるものがあった。しかし、たくさんのリンゴ農園に大きくて鮮やかな色のリンゴが生っている様子も見ることが出来、人々が助け合いの中で復興に向けて進んでいる事を感じた。

２．長沼農産物直売所「アグリながぬま」

長沼農産直売所「アグリながぬま」では、旬の野菜やリンゴが販売されていて、たくさんの人で賑わっていた。視察をした日は車通りも多く道も整備されていたが、災害当時の様子を写真で見ると、１メートル以上の水が押し寄せてきていたことが分かりとても驚いた。「アグリながぬま」の前の大通りが一面水に覆われている写真では、氾濫した水の水量が想像しやすく、氾濫した千曲川の堤防より少し離れた場所でも大きな被害があったことを知ることができた。災害時は、今の観光客も多く賑わっている様子からは想像の出来ないような恐怖と不安があったのだろうと感じた。また「アグリながぬま」の直売所で買い物をしている時に、地元の方がおすすめのリンゴの種類や、おいしいリンゴの見分け方を教えてくださり、地元の方のやさしさにも触れることが出来た。

３．北部スポーツ・レクリエーションパーク

北部スポーツ・レクリエーションパークは、高くてとても眺めの良い場所にあり、千曲川氾濫の際に避難所とされていた。避難者数は最大時で550人を超えていたようで、多くの方が不安な日々を過ごしていた場所である。この避難所にはたくさんのボランティアの方が手伝いに来ていたようで、家の清掃や瓦礫の撤去のボランティアだけでなく、大人が家の清掃をしている間の子どもたちの遊び相手なども行っていたことを聞いた。このような被災した方の様々なニーズに地域の方やボランティアの方が、



お互いに助け合いながら対応していたことを知った。また、避難者の中には、高齢者や障害者などの、集団での避難生活が困難な方もいたため、このような特別なニーズに対応できるような福祉避難所も用意されていたという。しかし、福祉避難所での集団生活も困難な方は、受け入れを拒否せざるを得ず、災害時のどうする事も出来ない現実があったことを学んだ。この話を聞き、避難所では、お互いが迷惑にならないよう周囲の人に気を使いながら生活しなくてはいけないという意識があるので、重度の自閉症などでパニックを起こしてしまう方や、様々な障害の特性を持っている方、そしてその家族が孤立してしまうことが問題であると感じた。障害でのニーズは一人ひとり違うため、災害時に限らず日ごろから、住民の障害者理解を進めることが大切だと改めて感じた。

４．まとめ

今回のスタディーツアーでは、過去最大と言われている台風19号から１年たった長野市の様子を視察するという、とても貴重な体験をすることが出来た。実際に災害被害にあった現場を自分の目で見るという体験は初めてのことだったため、テレビで災害の様子を見た時の衝撃や感情よりも、もっとたくさんの感情がこみあげてきて、自分が今、被災者としてこの場にいたらどのような気持ちなのだろうかということを考えながら、被害にあわれた方々の気持ちや不安を想像することが出来た。

私の住んでいる地域は台風19号で大きな被害をうけなかったので、災害から１年たった今では台風の恐怖や不安が記憶から薄れていたが、今も苦しんでいる方々が多くいるということを今回のスタディーツアーで知り、被害にあわれた方々の思いに少しでも寄り添い、今の自分にできることを考える事が大切だと感じた。今回の学びを活かして、今後いつ起こるか分からない自然災害に備えて、福祉の視点から災害について考えていこうと思う。

台風19号の被災状況と復興の状況を知る

総合福祉学部　社会福祉学科　４年　吉野　栞奈

今回のスタディーツアーでは、台風19号により被災した長野市長沼地区の被災状況と１年が経過した復旧・復興状況の視察を行った。まずは１つ目のポイントの長沼支所・交流センター奥・堤防手前に行った。そこには被害にあった体育館がそのまま残っており、その体育館を見たときに今回の台風19号の被害の大きさを１番感じた。被災地ポイントに設置されている専用サイトで当時の台風の被災状況を見ることができ、１年前と比較してみると周りの瓦礫などがすでに撤去されていて復興しつつあった。しかし、家にブルーシートをかぶせている家があったりとまだ当時の被害が残っていたり、また、復興していても家が全壊してしまった被災者は元の場所に住むことができないため被災者の方々のことを考えると胸が痛くなった。さらに、台風の被害によって使えなくなってしまった新幹線もあった。２つ目のポイントの長沼農産物直売所「アグリながぬま」では、被災当時の状況をみると車が埋もれてしまうくらいまで水がきていたが、被害があったことを感じさせないくらい復興していた。多くの種類のりんごがあり現地の方は、おいしいりんごの見分け方を知っていて、全然知らない私たちに教えてくれ長野の方の温かさを実感した。３つめのポイントの北部スポーツ・レクリエーションパークは避難所に使っていたところである。多くの人が集まるため、プライバシーの保護が難しいという話を聞き、確かにひとつの空間に集まり、生活するためプライバシーの保護はなかなか難しいと思った。障害をもっていて避難所のような多くの人が集まっているところに来ると普段との環境の違いにパニックになってしまうなどの理由で、来られない人がいるため避難所で生活することができない人たちをどう支援するのか考えていく必要があると思った。また、避難所にいる方々は大きな不安を抱えて、慣れない環境にストレスを感じている方も多くいると思うので誰かがすぐに相談に乗れるような環境を整えることが大切だと思った。午前中に被災地のポイントをめぐり、昼食は善光寺の近くで精進料理体験をした。精進料理を食べるのは初めての体験だったため、どのような料理が出てくるのかまた味が全然予想が出来なかったが、肉や魚を使えない代わりに作り方を工夫した料理が出てきて普段はできない貴重な体験をすることが出来た。

台風被害をテレビや新聞などでは見ることは多々あったが、現地に行って実際に自分の目で見るということを今まで経験したことがなかったため、今回のスタディーツアーはとても貴重な経験だった。テレビなどで見ていたときより被害が大きく、実際に見たからこそ感じることもあり、現地に行き目で見

て、雰囲気を感じることは大切だと改めて実感した。もし、自分が住んでいるところでこのような大きな自然災害が起きたらどうするのだろうかということを考えるきっかけにもなった。台風から１年経っていてもまだ手を付けられていないところがあり、いまも仮設住宅に住んでいる人もいるのでこのような方々が一日でも早く今までの普通の生活に戻ることができるよう、なにか手助けできることがあれば積極的に行っていきたい。

被災地の一年後を視察して感じたこと

総合福祉学部　社会福祉学科　４年　小林　季葉

今回初めてスタディーツアーに参加させていただいて、現地の状況を視察して、未だに当時の面影が残っていて衝撃を受けました。ニュースなどで見ることはありましたが、実際に見ると当時の悲惨な状況が想像でき、貴重な体験をさせていただきました。その中でも、「長沼支所・交流センター」は、建物が当時のまま残っており、周辺にもその面影があり、特に印象に残っています。

○長沼支所・交流センター

被災した当時のまま、建物が残っていた。

この建物のすぐ近くは堤防があり、川がある場所だった。建物は水が押し寄せたからなのか、いたるところに大きな穴があいており、建物内は土砂や木が流れ込んでいた。

周辺は、家の屋根が流れ着いていたり、住宅はブルーシートがかかっていたり、未だに爪痕が残っていた。

スタディーツアーIN長野 レポート

人文学部　歴史学科　３年　伊藤　美咲

１．体験記

2020年10月31日土曜日、令和元年度台風19号により千曲川が氾濫し被災した長野市長沼地区へ復興状況の視察に訪れた。新幹線で長野駅まで行き、そこからはタクシーで移動した。訪れた場所は全部で５カ所だ。１カ所目は長沼支所・交流センター奥・堤防前だ。ここは千曲川の堤防決壊地点となっている。２カ所目は長沼農産物直売所「アグリながぬま」だ。ここではりんごやマスカットなどの果物やトマトなどの野菜などが売っていた。そして３カ所目は、北部スポーツ・レクリエーションパークだ。ここでは避難所生活について知ることができた。４カ所目は豊野温泉「りんごの湯」だ。ここでスタンプラリーの景品を受け取った。その後昼食で善光寺近くの兄部坊というところで精進料理体験をした。普段精進料理を食べる機会がないのでとても貴重な体験ができた。最後に訪れたのは善光寺だ。善光寺ではお寺の方に説明をしていただきながら回った。中でもお戒壇巡りがとても印象に残った。今回のスタディーツアーでは全体を通して貴重な体験ができ、災害についても様々なお話を聞け、見学できたのでとても充実した時間を過ごせたと思う。

２．長野県ボランティアツアー時との比較

2020年２月21日～23日にも災害復興のボランティアで長野市博物館の文化財レスキューに参加したが、その時に長沼支所・交流センター奥・堤防前に訪れた。その時と比較してみると、２月の時と比べると道路が舗装されて、土もかなり撤去されていた。２月に訪れた際は土埃が酷かったが、今回はそこまで気にならなくなっていた。植物や農家の野菜や果物も以前見た時とは違い、土も入れ替えてしっかりと育っていた。しかし、まだ被害を受けた時とほぼ変わらない状態でそのまま残っている建物などもあった。決壊地点の周辺の家もだいぶ綺麗にはなっているが土の跡も残っていて、住むのを諦めてしまった人も少なくないそうだ。昔からある日本伝統的な立派な家が多いが高齢化が進み、家をなおして住むよりも他の所に引っ越した方が良いと考える人が多いようだ。昔からある立派な家がなおらないのは残念に思うが仕方がないことなのかもしれないとも思い、少し複雑な気持ちになった。今回再び訪れてみてまだそのまま残っているものもあるところを見てそれだけ大きな災害だったことがわかった。災害が起こるとすぐには元に戻らないことがよく分かった。前回と今回のツアーで見たこと、聞いたこと、感じたことなどを忘れずにいたいと心から思った。

３．比較写真

２月 長沼支所・交流センター奥・堤防前	10月 長沼支所・交流センター奥・堤防前

８か月後の被災地

人文学部　歴史学科　３年　岡村　七海子

2020年10月31日、長野県でのスタディーツアーに参加しました。このスタディーツアーの目的は、2019年台風19号により千曲川が氾濫し、被災した長野県長沼地区の１年経った状況を視察することでした。実は、別のボランティアツアーで、今年２月21日～23日にも長沼地区を訪れました。ですので、本レポートの後半で２月の状況と比べてどう変わったか、触れていきたいと思います。

今回スタディーツアーでは、長野市復興支援課主催の「デジタルスタンプラリー」に沿って活動しました。仕組みは、スタンプラリーポイントに訪れ、設置してある看板のQRコードを読み込むとスタンプが付き、また、各ポイントの当時の被害状況がわかる写真を見ることができます。つまり、その写真と自分が今いる場所が同じ場所なので、被害の実態を知ることができるのです。現在、「デジタルスタンプラリー」は終了していますが、各ポイントの当時の写真・動画はサイトで見ることができます。ただし、閲覧終了時期未定とあるので、いつまでも見られるわけではなさそうです。容易に被災時と現在の比較ができる写真があり、また場所によっては当時の動画も見られる「デジタルスタンプラリー」のサイトは、なるべく長く残すべきだと考えます。

では、２月の写真と今回の写真で、おおよそ同じ場所を撮ったものを比べてみたいと思います。右の赤味のある屋根の建物は、千曲川堤防の決壊場所に近い長沼体育館です。堤防に近いため、体育館自体

図１　２月21日撮影

図２　10月31日撮影

もそうですが、周りにある建物などの損壊はひどい状態で、ありのままに残っているのが２月（図１）で見たものでした。ところが今回訪れたところ、図１左の壊れた家は撤去されて更地になり、また舗装道路ができており、復興のためにすすんでいるのだな、と感じました。この場所が「デジタルスタンプラリー」ポイントの１つだったからか、長沼体育館は２月と変わらない状態で残っていました。今後、長沼体育館が水害の脅威をものがたる建物として遺されるのか、気になるので現地に行けなくても情報を収集したいと思っています。こうして、２度にわたって長沼地区を訪れて、災害から約４か月後、１年後の様子をみたことは、災害への危機感をもたされ、また被害を受けた地域に対して自分にできることはないのかを考えるきっかけになりました。

2020年度　第８回　スタディーツアーのレポート

2020年10月31日（土）

人文学部　歴史学科　３年　嶌田　陽香

１．事前学習

事前学習として２月に長野で行われた文化財レスキューについて振り返りました。

２月に長野で行われた文化財レスキューでは主に博物館に持ち込まれたもの（書類や経典など）の泥等を除去する作業を行いました。文化財レスキューを行う以外にも千曲川が決壊した場所まで参加した者全員で歩いていくこともしました。当時はまだ壁が崩れた建物などの撤去が終わっていない場所が数多くあり、テレビで見たような光景を実際に見ることが出来ました。また、リンゴの木から実がたくさん地面に落ちており腐ったにおいを発している果樹が多くありました。

写真１　壁が倒壊した家屋

写真２　リンゴの木

２．体験・感想

10月に再度長野に行きました。前回のボランティアでも行った堤防が決壊した場所に行った際にはとても驚きました。決壊場所の手前にあった建物がなくなっており綺麗になっていたからです。中にはまだ撤去されていない建物もありましたが、多くの建物はなくなっていました。また、土砂に浸かった新幹線も見に行きました。新幹線の側面に土砂の線が残っており、そこから実際の土砂の高さを実感できました。

写真３　新幹線

長野市内を見て回る際にはデジタルスタンプラリーを行いながら被災地を回りました。スタンプラリーのチェックポイントでは被災当時の写真を見ることが出来ました。写真を見て、今自分が立っている場所が土砂で沈んでいたのだとわかると災害があったと感じられないほどもとに戻っていることが実感できました。

お昼ご飯は精進料理を食べました。場所は善光寺の宿坊「兄部坊」です。初めて精進料理を食べましたが、想像していたよりも出てくる料理の数が多く、かつ動物性の食材を使用していないとは思えないほどにとても満たされるお昼ご飯でした。

お昼ご飯を食べた後は「兄部坊」の方に善光寺を案内していただけました。２月の際にも訪れてはいますが、その際は善光寺の夜間のライトアップを見たので日が出ている際に見るとまた違う雰囲気でした。

写真４　長沼体育館

写真５　精進料理

写真６　善光寺

写真７　善光寺ライトアップ

ボランティア活動における
助成制度の創設について

2020年６月25日

ボランティア活動における助成制度について

淑徳大学地域支援ボランティアセンター

１．助成制度の目的

より多くの学生が主体的に災害支援をはじめ、幅広いボランティアへの取り組みができるように全学的に支援することを目的とし、学生個人、サークルやゼミ等でボランティアに取り組む場合の活動経費を助成する制度を創設する。

２．活動経費の一部助成の申請資格

（1）本学の学生、または本学の学生が主体となって活動するサークルやゼミなどの団体
（2）活動報告書の提出ができる方

３．活動経費助成の申請対象となる【支援Ａ】または【支援Ｂ】の活動内容

【支援Ａ】　被災した地域の災害支援活動で、以下の（1）から（3）のいずれかにあてはまるもの

（1）災害ボランティアセンター（自治体、社会福祉協議会等の諸団体が運営）等が募集し、活動を証明できるボランティア活動
（2）被災地の住民組織や社会福祉法人、NPOと協働して行う復興支援 ボランティア活動で淑徳大学地域支援ボランティアセンターが認める活動
（3）その他淑徳大学地域支援ボランティアセンターが認める活動

（活動例：令和元年台風第19号、令和元年台風第15号、平成30年北海道胆振東部地震、平成30年７月豪雨、平成28年熊本地震、東日本大震災他、自然災害にて、被災した地域の災害支援活動や復興支援活動）

【支援Ｂ】　新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動

（1）自治体や住民組織、社会福祉法人、NPO等と協働して行うボランティア活動で淑徳大学地域支ボランティアセンターが認める活動
（2）本学の学生が主体となって活動する取り組み
（3）その他淑徳大学地域支援ボランティアセンターが認める活動

４．助成の内容

淑徳大学地域支援ボランティアセンターにて協議の上、助成の対象として承認された活動について以下のとおり助成する。

【支援Ａ】　被災した地域の復興支援活動の助成内容

（1）１回のボランティア活動に支出した交通費相当分のクオカード（１人あたり3,000円を上限）を支給する。

※１　交通費とは，ボランティア活動を行う場所との公共交通機関の往復運賃とする。

※２　申請者の主とする通学キャンパスの最寄り駅を出発・帰着点として交通費を算出する。

(2) 同一学生が同一年度内に受給できる助成の回数は、原則として３回までとする。
（申請者多数の場合は、助成対象期間でも応募を締め切る場合があります。）

※学部、学科、ゼミ単位でボランティアツアーを企画する場合はセンターまで事前にご相談いただければ、別途対応させていただきます。

【支援Ｂ】　新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動の助成内容

(1) ボランティア活動経費の４分の３相当額を支給する。（上限額10万円まで）
・助成件数：年間５件まで
（助成件数が上限に達した場合は、助成対象期間でも応募を締め切る場合があります。）

※学部、学科、ゼミ単位で企画する場合はセンターまで事前にご相談いただければ、別途対応させていただきます。

５．申請の流れ

〈【支援Ａ】被災した地域の災害支援活動の場合〉

≪活動前≫　■必要書類は淑徳大学HPまたはS-Naviからダウンロードして記入すること。

STEP.1

代表者が、ボランティア活動届出書【様式１（支援A)】および参加者予定者名簿【様式２（支援A)】を各キャンパスボランティア窓口または、淑徳大学HP「ボランティア活動経費助成の申請フォーム」にて提出してください。

◆千葉キャンパス・千葉第二キャンパス：千葉キャンパス地域支援ボランティアセンター（15号館１階学生サポートセンター内）
◆埼玉キャンパス：学事部学生厚生（１号館１階）
◆東京キャンパス：東京ボランティアセンター（３号館１階　ボランティアセンター）

STEP.2

STEP. １で提出された書類を、各キャンパス当該責任者が確認し、淑徳大学地域支援ボランティアセンターに報告します。その後センターにて協議し、助成対象予定者を決定します。

※申請は活動前に行ってください。手続き状況によりボランティア活動後の支給となる場合があります。

STEP.3

ボランティア活動の実施【助成対象期間　2020年９月１日～2021年３月31日】

※「新型コロナウィルス感染症に対応したボランティア活動における健康管理・感染予防の手引き」を実施前に必ず確認し、健康管理と感染症予防を行ってください。

STEP.4

活動終了後２週間以内に、代表者は以下の書類を各キャンパスボランティア窓口に提出してください。

①ボランティア活動報告書【様式３（災害A)】
②ボランティア活動証明書【様式４】（災害A）（受入先の書式でも可）
③参加者予定者名簿【様式２（災害支援)】 STEP. １で提出した書類の「出欠状況」に○をつけてください。

STEP. 5

活動終了後２週間以内に、参加者は淑徳大学HP「ボランティア活動報告フォーム」にて下記の内容を送信してください。

◆件名：ボランティア（参加日 - 団体名）

◆本文：感想（活動や支援をして思ったこと、ボランティアを考えている人に伝えたいこと）

※本メールおよびSTEP. 4 報告書内の「感想」等を、大学HP、またはボランティアセンター発行の活動報告等で紹介する場合があります。

■ボランティア保険について

ボランティア活動の前に、必ず「ボランティア保険」に加入してください。

【災害ボランティアに参加する場合】

「ボランティア保険（天災コース）」は最寄りの社会福祉協議会が運営するボランティアセンターで加入できます。

※ボランティア保険の加入費用は自己負担です。（目安：500円）

〈【支援B】新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動の場合〉

≪活動前≫　■必要書類は淑徳大学HP or S-Naviからダウンロードして記入すること。

STEP. 1

代表者が、ボランティア活動助成申請書【様式１（支援B）】および参加者名簿【様式２（支援B）】を各キャンパスボランティア窓口または、淑徳大学HP「ボランティア活動経費助成の申請フォーム」にて提出してください。

◆千葉キャンパス・千葉第二キャンパス：千葉キャンパス地域支援ボランティアセンター（15号館１階学生サポートセンター内）

◆埼玉キャンパス：学事部学生厚生（１号館１階）

◆東京キャンパス：東京ボランティアセンター（３号館１階　ボランティアセンター）

STEP. 2

STEP. １で提出された書類を、各キャンパス担当者が確認し、淑徳大学地域支援ボランティアセンターに報告します。その後センターにて協議し、助成対象活動を決定します。

STEP. 3

センターから、申請代表者に助成の採否を連絡します。（申請から10日前後）

STEP. 4

活動経費見積書【様式３】を提出いただき、助成額を内定し、内定額の８割を支給します。（千円単位で切り上げ）

支給方法の詳細は、別途お知らせします。

STEP. 5

ボランティア活動の実施【助成金対象期間　2020年９月１日～2021年３月31日】

※「新型コロナウィルス感染症に対応したボランティア活動における健康管理・感染予防の手引き」を実施前に必ず確認し、健康管理と感染症予防を行ってください。

STEP. 6

活動終了後２週間以内に、代表者は以下の書類を各キャンパスボランティア窓口に提出してください。

ボランティア活動報告書【様式４（支援B)】

ボランティア活動経費収支報告書（領収書添付）【様式５（支援B)】

STEP. 7

STEP. 6 の収支報告書により、STEP. ４の支給額との差額を計算し、支給（精算）します。（千円単位で切り上げ）

STEP. 8

活動終了後２週間以内に、参加者は淑徳大学HP「ボランティア活動報告フォーム」にて下記の内容を送信してください。

◆件名：ボランティア（参加日 - 団体名）

◆本文：感想（活動や支援をして思ったこと、ボランティアを考えている人に伝えたいこと）

※本メールおよびSTEP. 6 報告書内の「感想」等を、大学HP、またはボランティアセンター発行の活動報告等で紹介する場合があります。

以上

《提出先》各キャンパスボランティア窓口　　【様式１（支援 A)】

届出日２０　　年　　月　　日

ボランティア活動届出書

◆参加者情報

所属	学部　　学科　　年
代表者	（ふりがな） 学籍番号：　　氏名：
連絡先	電話番号：　　e-mail：
団体名	（ふりがな） 団体名：　　参加予定人数：　　名

※団体の場合のみ団体名と参加予定人数を記入してください。

◆活動概要

活動内容	
活動場所	県　　市・町・村
日　　程	月　　日　～　　月　　日

※募集要項等があれば添付してください。

◆受入先

受入先団体名	
受入連絡先	住所： 電話番号：
受入先区分	□自治体　□ＮＰＯ法人　□社会福祉協議会　□教育機関　□財団法人 □社団法人 □企業（　　）□その他（　　）

◆参加理由

《今後の流れ》

▼届出・受領後２週間以内に、助成対象の可否について連絡

▼安全に気を付けてボランティア活動に参加

▼活動後２週間以内に、「ボランティア活動報告書【様式 3】」、ボランティア活動証明書【様式 4】を提出

▼参加者全員が、活動後１週間以内に「感想」を提出

▼参加者一人ひとりに各キャンパス窓口にて、原則２週間以内にクオカードを受領すること

決裁日　　月　　日

承認結果　可　・　不可　　活動№_____

責任者			受付

【様式２（支援 A)】

《提出先》各キャンパスボランティア担当窓口

参加者予定名簿

№.	学科	学年	学籍番号	氏名	当日の出欠	金額	受領日	サイン
1					出　欠			
2					出　欠			
3					出　欠			
4					出　欠			
5					出　欠			
6					出　欠			
7					出　欠			
8					出　欠			
9					出　欠			
10					出　欠			

≪活動前≫

▼活動届出書（様式 1）に添付する際は、「学科、学年、学籍番号、氏名」を記入し提出してください。

≪活動後≫

▼活動報告書（様式 3）に添付する際は、「当日の出欠」のいずれかに〇をつけて再提出してください。

▼参加者は「当日の感想」を提出した後、各キャンパス窓口にてクオカードを受領し「受領日＆サイン」欄に記入してください。

届出日　２０　　年　　月　　日

【様式 3（支援 A)】

ボランティア活動報告書

活動№. _____

◆参加団体（所属ゼミ・サークル・部活動等）

所属	キャンパス：□千葉　□千葉二　□埼玉　□東京 学部　　学科　　学年
代表者	学籍番号：　　氏名：
団体名	実際に参加した人数　　名

※団体の場合のみ団体名と参加人数を記入してください。

◆活動内容

活動内容（どのような活動をしましたか？具体的にお願いします）
活動中のトラブル □なし　□負傷　□体調不良　□　その他（　　）
感想（活動や支援をして思ったこと、ボランティアを考えている人に伝えたいこと）
あなたたちチームが知った被災者の困りごとなど

※大学のホームページや活動報告等で紹介する場合があります。

※この書類には、以下の書類を添付してください。

①ボランティア活動証明書【様式 4】（受入先の書式でも可）

②団体の場合は参加者予定名簿【様式 2】　※出欠状況に〇をして再提出してください。

責任者			受付

【様式４（支援 A)】

淑徳大学地域支援ボランティアセンター 御中

ボランティア活動証明書

以下の学生が復興支援ボランティア活動を行ったことを証明します。

受入先の皆様へお願い

淑徳大学では、復興支援ボランティアを行う学生に対して、交通費等の一部助成を行っております。
学生が申請を行うため、活動を受け入れて頂いている皆様からの活動証明を必要といたします。
お手数をおかけいたしますが、下欄に、必要事項を記入のうえ、ご署名と押印をお願いたします。

《証明欄》　　20　　年　月　日

受入先名（代表者名）	印
受入人数　　名	
住所：	
電話：	

※以下は学生が記入してください。

淑徳大学　　学部・研究科（Ｍ／Ｄ）　　年

学生氏名

○受入先名

○活動名

○活動地域・場所

○実際の活動期間　　年　月　日（　）～　　年　月　日（　）

○活動内容

【様式１（支援Ｂ)】

届出日２０　　年　　月　　日

《提出先》各キャンパスボランティア窓口

ボランティア活動助成申請書

（ふりがな） 団体名	
所属	学部　　学科　　学年
代表者	（ふりがな） 学籍番号：　　氏名：
連絡先	携帯番号：　　e-mail：

活動目的及び活動内容	
活動場所・活動地域	
活動実績	有　・　無　（活動実績がある場合は参考資料を添付してください。）
活動日程 （予定を含む）	
本助成金で実施する事業の収支予算	総額　　円 内訳（概算）：

※募集要項等があれば添付してください。

◆受入先等（連携先や先方があれば記入してください。）

（ふりがな） 受入先名	
受入連絡先	住所： 電話番号：
受入先区分	□自治体　□ＮＰＯ法人　□社会福祉協議会　□教育機関　□財団法人 □社団法人 □企業（　　）□その他（　　）

決裁日　　月　　日

承認結果　可　・　不可　　活動№＿＿＿＿

責任者			受付

【様式２（支援Ｂ)】

《提出先》各キャンパスボランティア担当窓口

活動者名簿

No.	学科	学年	学籍番号	氏名	備考
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					

【様式３（支援Ｂ)】

《提出先》各キャンパスボランティア担当窓口

活動経費見積書

	項目	予算額（単位：円）	備考
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
	合計		

責任者			受付

【様式４（支援Ｂ)】

《提出先》各キャンパスボランティア担当窓口

ボランティア活動報告書

活動№. ＿＿＿＿＿＿＿＿

◆参加団体

（ふりがな） 団体名	
所属	学部　　学科　　学年
代表者	（ふりがな） 学籍番号：　　氏名：
連絡先	携帯番号：　　e-mail：

◆活動内容

活動実施内容（どのような活動をしましたか？具体的にお願いします）
感想（活動や支援をして思ったことなど）
今後の活動について

※大学のホームページや活動報告等で紹介する場合があります。

責任者			受付

【様式５（支援Ｂ)】

《提出先》各キャンパスボランティア担当窓口

ボランティア活動経費収支報告書

	項目	予算額（単位：円）	備考
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20			
	合計		

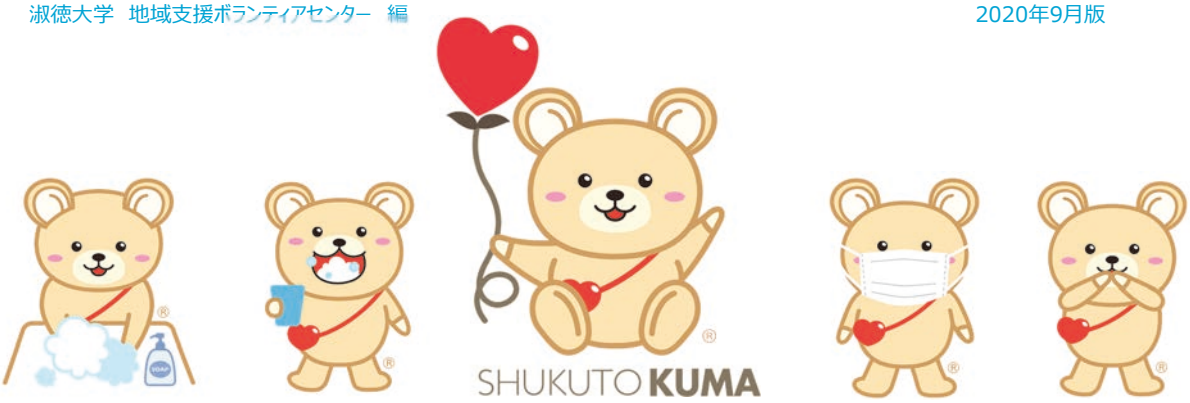
【領収書添付欄】　ホチキスで留めて添付してください。※収まらない場合は別の用紙での提出可

責任者			受付

感染症対策の手引き

新型コロナウィルス感染症に対応した
ボランティア活動における
健康管理・感染予防の手引き

淑徳大学　地域支援ボランティアセンター　編　　2020年9月版



はじめに　～学生の皆さんへ～

ボランティア活動中は、新型コロナウィルス感染対策に注意！
正しい知識と対応で、地域社会の安心・安全に寄与しましょう！

〇2020年度初頭より、新型コロナウィルス感染症が世界中で猛威をふるい、予定されていた東京オリンピック・パラリンピック2020も延期となりました。ワクチンの開発も年単位であり、まだまだ安心はできません。

〇淑徳大学の通常授業も、2020年度前学期は、遠隔授業が基本となり、現在、みなさんは自宅での学修を継続しています。ボランティア活動も自粛している方も多いかと思いますが、徐々に活動の再開を考えている人も多いころかと思います。

〇実際、さまざまに工夫し、自発的、開拓的、創造的に活動をしている人、グループもあるかと思います。そこで、この手引きは、引き続き警戒が必要な新型コロナウィルス感染症対策について、現段階の正しい知識と対応をとるなどして、淑徳大学の学生としての自覚と行動をもって臨んできましょう！

2020（令和２）年9月　淑徳大学地域支援ボランティアセンター

新型コロナウィルス感染症について、「今知っておくべきこと」

どのようなウィルスなの？

新型コロナウイルス“COVID-19”はコロナウイルスのひとつです。コロナウイルスには、一般の風邪の原因となるウイルスや、「重症急性呼吸器症候群（SARS）」や2012年以降発生している「中東呼吸器症候群（MERS）」ウイルスが含まれます。

ウイルスは粘膜に入り込むことはできますが、健康な皮膚には入り込むことができず表面に付着するだけと言われています。物の表面についたウイルスは時間がたてば壊れてしまいます。ただし、物の種類によっては24時間～72時間くらい感染する力をもつと言われています。

！！手洗いは流水で30秒以上！！

手洗いは、たとえ流水だけであったとしても、ウイルスを流すことができるため有効ですし、石けんを使った手洗いはコロナウイルスの膜を壊すことができるので、更に有効です。手洗いの際は、指先、指の間、手首、手のしわ等に汚れが残りやすいといわれていますので、これらの部位は特に念入りに洗うことが重要です。

また、流水と石けんでの手洗いができない時は、手指消毒用アルコールも同様に脂肪の膜を壊すことによって感染力を失わせることができます。

どのように感染するの？

一般的には飛沫感染、接触感染で感染します。閉鎖した空間で、近距離で多くの人と会話するなどの環境では、咳やくしゃみなどの症状がなくても感染を拡大させるリスクがあるとされています。（WHOは、一般に、５分間の会話で１回の咳と同じくらいの飛まつ（約3,000個）が飛ぶと報告しています。）

「飛沫感染」とは：　感染者の飛沫（くしゃみ、咳、つばなど）と一緒にウイルスが放出され、他の方がそのウイルスを口や鼻などから吸い込んで感染することを言います。

「接触感染」とは：　感染者がくしゃみや咳を手で押さえた後、その手で周りの物に触れるとウイルスがつきます。他の方がそれを触るとウイルスが手に付着し、その手で口や鼻を触ることにより粘膜から感染することを言います。WHOは、新型コロナウイルスは、プラスチックの表面では最大72時間、ボール紙では最大24時間生存するなどとしています。

厚生労働省ホームページより引用、赤字蛍光ライン等増補：一部改変

感染しないようにするにはどうすればよいの？

社会的距離と一般的な感染対策を

一般的に、肺炎などを起こすウイルス感染症の場合は、症状が最も強く現れる時期に、他者へウイルスを感染させる可能性も最も高くなると考えられています。

しかし、新型コロナウイルスでは、症状が明らかになる前から、感染が広がるおそれがあるとの専門家の指摘や研究結果も示されており、例えば、台湾における研究では、新型コロナウイルス感染症は、発症前も含めて、発症前後の時期に最も感染力が高いとの報告がされています。

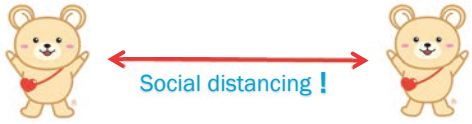
したがって、**人と人との距離をとること**（Social distancing：社会的距離）、外出の際のマスク着用、咳エチケット、石けんによる手洗い、アルコールによる手指消毒、換気といった一般的な感染症対策や、十分な睡眠をとる等の健康管理を心がけるとともに、地域における状況（緊急事態宣言が出されているかどうかや**お住まいの自治体の出している情報を参考**にしてください）も踏まえて、予防に取り組んでください。

ペットから感染はするの？

外出自粛により家にいる時間が長くなることもありますが、これまでのところ、新型コロナウイルスがペットから人に感染した事例は見つかっていません。一般に、動物との過度な接触は控えるとともに、普段から動物に接触した後は、手洗いや手指消毒用アルコールで消毒などを行うようにしてください。

（参考）

厚生労働省ホームページ：動物を飼育する方向けQ＆A
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/doubutsu_qa__00001.html



厚生労働省ホームページより引用、赤字蛍光ライン等増補：一部改変

具体的な予防法

３密回避の徹底

感染を予防するためには、基本的な感染予防の実施や不要不急の外出の自粛、「３つの密」を避けること等が重要です。

これまでに国内で感染が確認された方のうち重症・軽症に関わらず約80%の方は、他の人に感染させていない一方で、一定の条件を満たす場所において、一人の感染者が複数人に感染させた事例が報告されています。集団感染が生じた場の共通点は、特に、１．**密閉空間**（換気の悪い密閉空間である）、２．**密集場所**（多くの人が密集している）、３．**密接場面**（互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為が行われる）という３つの条件のある場では、感染を拡大させるリスクが高いと考えられています。

クラスター感染拡大に注意を

また、これ以外の場であっても、人混みや近距離での会話、特に大きな声を出すことや歌うことにはリスクが存在すると考えられています。激しい呼気や大きな声を伴う運動についても感染リスクがある可能性が指摘されています。多くの場合、ライブハウス、スポーツジム、医療機関、さらに最近になって繁華街の接待を伴う飲食店等におけるクラスターでの感染拡大が指摘されています。

厚生労働省ホームページより引用、赤字蛍光ライン等増補：一部改変

何より大事なのは、手洗い、うがい

「手洗い」と「うがい」

【手洗い】 **！！手洗いは流水で30秒以上！！**

流水でよく手を濡らした後に石鹸をつけて手のひらをよくこすります。

手の甲を伸ばすようにこすります。

指先、爪の間、指の間を念入りにこすります。

親指と手のひらをねじり洗いします。

手首も洗い流水でしっかりと流します。

手を洗い終わったら清潔なタオルや使い捨てのできるペーパータオルでよく拭きます。また、手を洗う際には指輪や時計などの装飾品を外して手洗いを行いましょう。

【うがい】

うがいは咽頭の粘膜付着したウイルスが体内に侵入する前に体外へ排出する効果が期待できます。外出から帰宅したときを含め頻回のうがいをお勧めします。

「うがい」のやりかた

①お口の中で「クチュクチュ」→出す
②上をむいて「ガラガラ」→出す
③もういちど「ガラガラ」→出す

政府関係が発行したポスター

接触を減らす10のポイント、新しい生活様式とは？

感染してしまった、と疑いを持ったとき

発熱などのかぜ症状がある場合は、学校やボランティアを控えるとともに、外出も控える。

休むことはあなた自身のためにもなりますし、感染拡大の防止にもつながる大切な行動だからです。

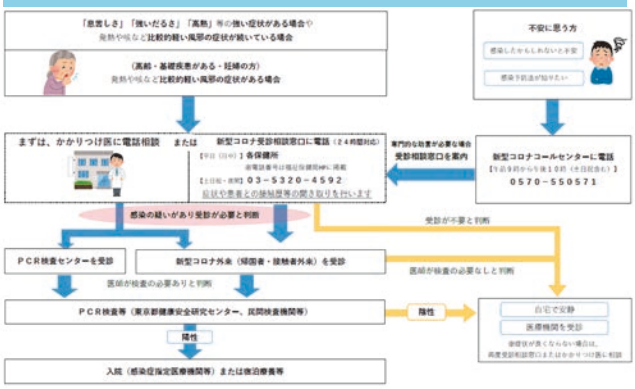
新型コロナウイルスへの感染が疑われるときは　最寄りの保健所などに設置される「帰国者・接触者相談センター」に連絡してください。

各都道府県が公表している帰国者・接触者相談センターのページ一覧
→https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/covid19-kikokusyasessyokusya.html（厚生労働省HP）

どんな時に連絡したほうが良いの？

息苦しさ（呼吸困難）、強いだるさ（倦怠感）、高熱等の強い症状のいずれかがある場合。
上記以外でも発熱や咳など比較的軽い風邪の症状が続く場合（症状が続く場合は必ず相談する。症状には個人差がある為、強い症状と思う場合はすぐ相談する。解熱剤などを飲み続けなければならない方も同様。）

かかりつけ医やコールセンターを含めた相談に関する問い合わせのフロー（東京都の場合）　：東京都福祉保健局ホームページより引用



おわりに

新型コロナウィルス感染症の知識、感染対策等自らとるべき行動は理解できましたか？

ボランティア活動の内容、あるいは、活動先でも、さまざまな感染予防対策を実施されています。確認し、それに必ず従ってください。

日々の体調管理と行動把握をきちんと行うなどして、自ら、他者、地域の安全を図りましょう。

（発行日：2020年9月1日①）

新型コロナウィルス感染症についての「健康等チェック表」　淑徳大学　地域支援ボランティアセンター：

学籍番号　　氏名

【重要】この「健康チェック表」は、自らの健康状態を管理することで、ボランティア活動時の新型コロナウイルス感染や拡大を防ぐためにつくられました。必ず検温及び健康状態を確認し、外出等の行動も記録してください。**もし、チェック表にて体温が高く、チェック項目に「ある」が存在し、体調の異変に気づいたら、活動を中止してください。**★これは個人情報です。慎重に取り扱うこと★

（活動期間前・活動期間中＜　　月　　日～　　月　　日：第　　週目＞）

	体調はいいですか？　下記、１から10について、異変がある場合はボランティア活動を控えてください。	月／日	／	／	／	／	／	／	／
		曜日	月	火	水	木	金	土	日
体調管理項目	1．毎日、体温を検温し記入してください		℃	℃	℃	℃	℃	℃	℃
	（起床時の検温時間を記入）		：	：	：	：	：	：	：
	2．咳		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	3．息切れ		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	4．痰（たん）		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	5．鼻水		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	6．筋肉痛		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	7．頭痛		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	8．下痢、嘔吐		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	9．味・匂いの異常		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	10．その他の体調不良		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
行動調査項目	11．本人の外出		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	（外出先の概要、あった人等を記入。裏面にも書けます）								
	12．同居の家族などに発熱		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	13．家族・本人のクラスター地域への県外出張		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	14．海外渡航		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	15．他濃厚接触（咳など症状がある人と30分以上滞在）		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない

行動範囲おぼえがき

【重要】★これは個人情報です。慎重に取り扱うこと★行動範囲を覚えておくことで、感染拡大防止に役立つ場合があります。

（<　　月　　日～　　月　　日：第　　週目>）

	外出状況、対面状況がある場合は、あるに○をし、必要最低限の内容を記録しておきましょう。	月／日	／	／	／	／	／	／	／
		曜日	月	火	水	木	金	土	日
外出の状況	1．アルバイト（場所　　）		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	2．同居の家族との会話や食事		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	3．友人・知人との会話や食事		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	4．買い物		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	5．ライブハウス等不特定多数の場所への訪問		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	6．病院通院		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	7．ランニング等外部での運動や散歩		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	8．その他		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	9．その他		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない
	10．その他		ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない	ある・ない

ボランティア活動における助成制度　実績報告

●新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動助成制度申請数・・・・１件
●新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動助成制度採択数・・・・１件

活動報告（新型コロナ感染拡大に伴うボランティア活動助成制度採択事業）

１．団体名：地域支援ボランティアセンター　学生常任支援員

２．代表者氏名：コミュニティ政策学科３年　B8C066　西澤　歩

３．取り組み名：雄勝町の風景や文化など魅力の詰め込んだ「ともいきカレンダー2021」作成事業
今後のスケジュール
４～12月：カレンダー案の作成　１～２月：カレンダー印刷　２～３月　：カレンダー配送

４．趣旨：千葉地域支援ボランティアセンター学生団体として、東日本大震災の復興支援を続けていたが、コロナ禍の自粛により活動が途絶えてしまった。雄勝の風景や文化、復興の様子など多くの人に知っていただくために、学生常任支援員の有志学生にて、雄勝町の風景や文化など魅力の詰め込んだ写真を集め「ともいきカレンダー2021」を作成する。

５．取り組み参加者人数　：　６　名
１）実践心理学科　４年　長谷部文音
２）コミュニティ政策学科　３年　西澤　　歩
３）社会福祉学科　３年　松田　夏音
４）社会福祉学科　２年　切金　夏輝
５）社会福祉学科　２年　五木田千尋
６）コミュニティ政策学科　２年　手崎　亮佑

６．収支予算
（収入の部）

科　　目	金　　額	摘　　要
１．大学地域支援ボランティアセンター助成金	100,000 円	（事業が採択された場合）
２．千葉ボランティアセンター負担分	39,605 円	
３．学生負担分	0 円	
合　　計	139,605 円	

（支出の部）

科　　目	金　　額	摘　　要
カレンダー作成費用	総額：　129,255 円 内訳：　500 部	業者：PAC プリントパック
雄勝への送料	総額：　10,350 円 内訳：160 サイズ× 5 箱	業者：ヤマト運輸
合　　計	139,605 円	

７．参加学生活動報告

総合福祉学部　実践心理学科　４年　長谷部　文音

●活動実施内容

2011年３月11日におきた東日本大震災から本年で10年となり、その節目の年にこのコロナ禍でもできる被災地支援、復興支援をカレンダー作成として行った。

カレンダーの内容として、使用される写真は全て宮城県石巻市雄勝町、もしくはボランティアセンターの活動を通して訪れた場所などの写真を使用。

また完成したものを、団体OBOG、関係者、雄勝町民への配布を行うものとした。

●感想

今年度はコロナウイルスの影響で現地を訪問することは叶わなかったが、何らかの形で復興支援として力になれている、意味のある活動をできているということが何よりも嬉しく思えた。今回は、昨年に引き続き２年連続でカレンダーを作成することができ、現地の人々に私達の思いを届けることができている事、繋がりの大切さも改めて実感した。

本来であれば新しい写真を起用したいところではあったが、次回作こそ現地を訪問する機会がある事を願いたい。

●今後の活動について

風化させてはいけない記憶と、途切れさせない関係性はこの活動においてとても重要であると考える。このカレンダー企画を継続的に行う、もしくはまた新たな形での復興支援を継続して行っていきたいと考える。

また、卒業生として被災地支援から復興支援への移り変わりをもう少し肌で実感し、今自分にできることは何かを考え、できることをしていきたいと思っている。

コミュニティ政策学部　コミュニティ政策学科　３年　西澤　歩

●活動実施内容

支援を続けている宮城県石巻市雄勝町を中心とした『ともいきカレンダー』を作成。今年度は雄勝町に行けなかったため、過去に撮影した写真や先輩から頂いた写真を集め、カレンダーの上半分に使用した。写真に雄勝のPRや応援する言葉を考え、各月々に記載した。カレンダーの下半分には日付、六曜、

祝日などを編集し2021に使用できるように編集を行った。この他に、表紙の編集や印刷の依頼などカレンダーを完成するために尽力した。

●感想

率直な感想としては、完成して良かったと思う。昨年と違い、宮城県石巻市雄勝町に行く事が叶わず、現在の雄勝の様子を集めることが難しかった。そんな中でも、写真提供して頂けて過去の写真から雄勝を紹介出来た。また、メンバーのみんながそれぞれの役割を行ってくれたので良いカレンダーが出来たと思う。現地の人からカレンダーを受け取った報告と「ありがとう」と感謝の言葉を貰ったと連絡があったので、作成して良かったと思う。

●今後の活動について

今後については、まず宮城県石巻市雄勝町に訪問してここ１年で変化した所を視察したいと考える。また、カレンダー作成したメンバーの中にもまだ宮城県石巻市雄勝町に行ったことの無い人がいるため現地の文化や風景に直接触れて欲しいと思う。その上で、カレンダーの他にも現地の良さを知ってもらうためにはどうするか、現地の人がどんなことを望んでいるのかなど私達がどんな支援が出来るか考え今後とも雄勝町へ支援を続けていきたいと思う。

総合福祉学部　社会福祉学科　３年　松田　夏音

●活動実施内容

ご縁のあった宮城県石巻市雄勝町の魅力あふれる姿をたくさんの方々に知ってもらいたいと思い、去年に引き続き今年も『ともいきカレンダー』を作成した。

活動内容としては、１月、２月、３月分の割り当てられた担当月データの日付変更、祝日の修正・色変更といった書き換え作業。また、他の活動員が作成したカレンダーに使用する画像の添削、担当月の画像一枚一枚につける言葉の立案、最終的に完成したカレンダーの最終確認を行った。

●感想

今年で震災から10年の月日が流れた。カレンダーを作成していく上でいくつもの写真を目にして、大須崎灯台からの美しい景色や伝統ある法印神楽の魅力など多くの人に知ってほしい、見てもらいたいと改めて思った。しかし、コロナによりサークル活動として龍澤祭や白幡の七夕祭りでカレンダー作成以外の復興活動を例年通りに行えないことがより無念に感じた。

また学校になかなか向かうことができず、全ての作業をLINEやメールを使って行い、直接意見を交わせないことが歯痒かった。

●今後の活動について

これからも引き続き『ともいきカレンダー』を作成し、宮城県石巻市雄勝町の魅力あふれる姿をたくさんの方々に知ってもらいたい。そして、龍澤祭や白幡の七夕祭りといった場で復興活動を積極的に行っていきたい。

また、今回はじめて対面で活動ができないという体験をした。とても大変だったがこの経験を活かし対面で行う活動が全てだとは思わず、オンラインといった他に活用できることで活動するということを考えなければならないと思った。

総合福祉学部　社会福祉学科　２年　切金　夏輝

●活動実施内容
　雄勝ともいきカレンダー
　雄勝ともいきカレンダー（2021年７月、８月、９月）の作成。

●感想
　雄勝の魅力を存分に伝えることが出来るように、心がけた。
　新型コロナウイルスの影響で今年の夏も現地に行くことは叶わなかったが、このカレンダーを見て、「コロナが落ち着いたら、雄勝に行ってみたい」と思う人が一人でもいるとうれしい。

●今後の活動について
　2021年度も現地に行くことは難しそうではあるが、この活動を途切れさせないように、千葉にいても出来る活動を模索していきたい。

総合福祉学部　社会福祉学科　２年　五木田　千尋

●活動実施内容
「ともいきカレンダー」というカレンダーを作成しました。これは、東日本大震災の被災地支援の一環としての活動です。私は、４月、５月、６月のカレンダーを担当しました。詳細は、画像や暦の編集を行いました。

●感想
　カレンダー作成は初めてでした。作成するにあたって、注意事項やわかりやすい方法を考え、どうすれば見やすいかなど、工夫して行いました。編集の難しい点はたくさんありました。特に、暦は普段触れず知らないため、苦戦しました。それでも、先輩方や同級生に教えてもらい、なんとか完成させることができました。

●今後の活動について
　私は、このカレンダーに掲載している写真を直接撮影したことがありません。そのため、毎年撮影場所になっている宮城県の雄勝町に行ってみたいです。また、そこで被災地の人々との関りを持ち、今後の活動に役立てていきたいと思っています。

コミュニティ政策学部　コミュニティ政策学科　２年　手崎　亮佑

●活動実施内容
　ともいきカレンダーという東日本大震災の被災地石巻市雄勝地区の写真を使ったカレンダーの作成を行った。この活動では、カレンダーに合わせた写真の選定から完成に至るまで活動した。
　コロナ禍の中で連絡を取り合いながら連携してそれぞれの担当月の編集等を行った。
　２月末には、現地の方々の手に渡り、その他にも地域支援ボランティアセンター学生支援員のOB、

OGの方々にも配布した。

●感想

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の中で活動することができたことが良かった。

この活動を通して、カレンダーの暦に触れ普段気が付かないところに配慮することができた。

今年は東日本大震災から10年という節目の年となりコロナ禍の中でも活動することができたことがひとつの支援ではないかと感じた。

●今後の活動について

今後ともこのような支援の形を継続して、多くの方に地域支援ボランティアセンターの活動を知っていただけるように継続して活動していきたい。

この活動を通して東日本大震災の被災地の様子や雄勝町の魅力を発信する一つの役割を果たしていると感じている。

認知症サポーター養成講座

この講座は学生のみならず教職員が地域社会の一員として、認知症と認知症の方への接し方を理解し、積極的に行動できることをめざして淑徳大学地域支援ボランティアセンター東京が主催しています。2020年度は、コロナ禍下、一般募集はオンライン（ZOOM）参加に限定されたため募集はありませんでしたが、人文学部の学生はオンライン、短期大学部の学生は感染対策を行った上で対面での受講をしました。オンラインと対面での講座を同時に行うことを「ハイブリット」と呼びます。こうした講座の開催は初の試みで、コロナ禍下、工夫して地域の社会活動に取り組みました。今後は、コロナ禍下でも地域住民とも連携できる取り組みについて検討し、積極的に企画・発信していきたいと思います。

◆東京キャンパス　令和２年12月４日（金）

学生、教職員を含め36名が出席しました。（内訳　人文学部20名、短期大学部15名、教員１名）

（講師）

社会福祉法人ハッピーネット若葉ゆめの園デイサービスセンターセンター長　　鹿糠沢　裕太　氏

認知症に対する正しい知識と理解をもち、地域で認知症の人やその家族に対して、できる範囲で手助けをする「認知症サポーター」の養成講座。まずは講師の先生から、認知症についての正しい知識を学び（写真①②）、その後、認知症の方の接し方についてワークショップを行い（写真③）、グループに分かれて話し合いました（写真④）。話し合った内容は、対面の学生は用紙を提出、オンラインの学生は、googleフォームを利用して提出し、講座を終えました。受講後、認知症サポーター養成講座を修了した学生・教職員には、受講の証としてオレンジリングが付与されました。

①認知症についての講座

②オンラインと対面によるグループワーク

③認知症の方への接し方（グループワーク）

④リアクションペーパーにまとめ

2. 各キャンパスにおける活動内容

2020年度　ボランティア活動実績（千葉キャンパス）

日時	種別	単発 継続	件名	依頼元	内容	人数	備考
7月	老	単	高齢者施設への折り紙ボランティア	東京ボランティア・市民活動センター	リモート	3	
7月～8月	老	単	高齢者施設への暑中・残暑見舞いボランティア	東京ボランティア・市民活動センター	リモート	5	
8月	障	単	視覚障碍者のための本のテキスト化ボランティア	東京ボランティア・市民活動センター	リモート	1	
8月	障	単	オンライン美術展ボランティア	東京ボランティア・市民活動センター	リモート	2	
9月～	教	継	八千代市立大和田小学校学習支援	大和田小学校	教員サポート	1	
9月～	教	継	千葉市立蘇我小学校学習支援ボランティア	蘇我小学校	教員サポート	3	
10月16日	教	単	大巌寺小キャンパスツアー	大巌寺小学校	教員サポート	2	
10月31日	他	単	なでしこリーグ	ジェフユナイテッド	スポーツ大会支援	3	
11月7日	他	単	なでしこリーグ	ジェフユナイテッド	スポーツ大会支援	1	
11月～	他	継	小学生への手話指導ボランティア	個人依頼（手話サークルへ）	リモート	6	
11月14日	障	単	パラスポーツフェスタちば	千葉県環境生活部	スポーツ大会支援	9	
11月～	教・他	継	夢のふなっこ（児童・生徒のための新しい居場所づくり支援事業）	NPO法人　学校支援さざんかの会	スタッフ支援	1	
合計						**37**	

＊災害支援活動ボランティアは「災害関連ボランティア活動実績」を参照。

＊手話指導ボランティアは11月より月2，3回、3月まで実施された。2021年度も継続予定。

＊直接学生が先方と連絡をとって実施したボランティアは一部含まれず。

＊2020年度は新型コロナウィルス流行による緊急事態宣言発令に伴い、学生のボランティア活動が大幅に制限された。

2020年度　災害関連ボランティア活動実績（千葉キャンパス）

淑徳大学地域支援ボランティアセンター

日時	種別	単発・ 継続	件名	企画元	内容	参加者 （延べ数）	備考
通年	被災地支援 （石巻市雄勝）	継	【大学千葉企画】 雄勝カレンダープロジェクト	地域支援 ボランティアセンター （千葉キャンパス）	復興支援カレンダー作成　※1	17	平成23年度から継続中
10月31日	被災地支援 （長野市長沼地区）	継	【大学全体企画】 スタディーツアー	地域支援 ボランティアセンター	令和元年度台風19号による 被災地の視察	3	
合計						17	
大学全体企画参加者						3	
総合計						**20**	

※1　現地には赴かず、カレンダーの作成及び郵送のみ。（大学ボランティア助成金認可）

雄勝地区への「学習支援ボランティア」「パネルシアターキャラバン」は今年度中止。

東日本大震災10年を迎えるにあたって、大学全体で「TOMOIKI企画」（大学特設ホームページ）を実施、ボランティア常任支援員OBOGよりコメントを募集、掲載した。

一般ボランティアは「ボランティア活動実績(千葉キャンパス取りまとめ分のみ）」参照。

2020年度　活動実績(千葉第二キャンパス）

日時	単発継続	件名	依頼元	内容	人数	備考
10月30日	単発	松が丘地区緑化推進プロジェクト	松が丘地区　千葉市緑化推進プロジェクト （千葉市中央区地域活性化事業）	地域緑化推進	3名	
11月13日	継続	淑徳オレンジカフェ（ひだまり）	ひだまり	運営支援	3名	
8月11日～ 8月18日	単発	図書館開放ウィーク	千葉県立南高校	運営支援	10名	

※図書館開放ウイークは、千葉南高校との大高連携締結にともない、夏休み期間に高校生へ図書館を有効活用して頂くために開放しました。

2020年度　ボランティア活動実績（埼玉キャンパス）

日時	種別	単発・継続	件名	依頼元	内容	人数	備考
7月～3月	教育	単年	小学校への学習支援ボランティア	提携市町（朝霞、川越、所沢、富士見、三芳）	学習支援	48	
7月～1月	教育	単年	鶴っ子土曜塾	鶴ヶ島市	学習支援	11	
8/1～8/2	教育	単年	水谷公民館　青空勉強会	水谷公民館	学習支援	4	
8/1.3.6.17.20	教育	単年	放課後児童クラブ「ひまわり」	放課後児童クラブ「ひまわり」	学習支援	1	
8/16～22	教育	単年	福福子どもの笑顔プロジェクト	福井市自然体験交流推進協議会	子ども達の活動面、生活面のサポート、マネジメントサポート	1	
9月～3月	教育	単年	ちば！教職たまごプロジェクト	千葉県	学習支援	3	
11月29日	教育	継続	第11回パネルシアター学生交流会	パネルシアター教育研究会	パネルシアター発表、および交流	9	
2/1～2/18	教育	単年	東日本大震災復興10年TOMOIKI企画～できることをいまここから～	淑徳大学ボランティア委員会	防災についてのオリジナル・パネルシアター制作	14	
合計						91	

＊直接学生が先方と連絡をとって実施したボランティアも含まれています。（教育学部）

＊2020年度はコロナ禍のためボランティアは行っておりません。（経営学部）

＊単位取得できる科目としてのボランティアは含んでいません。（教育学部）

2020年度　ボランティア活動実績（東京キャンパス）

日時	学科	件名	依頼元	内容	人数	備考
4月～6月	表現	ユニバーサルキッズすまいるコンサート	ユニバーサルキッズすまいるコンサート実行委員会	イベントチラシとチケットの制作	1	8月イベント中止
10月～11月	表現	センターPR動画制作	センター事業	動画制作	1	
11月～3月	表現	センター広報誌制作	センター事業	リモート取材・原稿執筆他	4	
9月～10月	こ・介	クリスマスカードプロジェクト	NPO法人　ワンダーアートプロダクション	カード制作	3	
11月1日	こ	すくすくまつり（オンライン）	すくすくまつり実行委員会	動画（創作ダンス）制作	1	
12月11日	社	寒中見舞い（前年度手話うた参加者宛）	センター事業	カード制作	10	
合計					20	

*新型コロナウィルス感染症拡大の影響で対面活動を行っていません。

３．東日本大震災復興10年TOMOIKI企画

～できることをいまここから～の実施報告

2021年３月

淑徳大学　地域支援ボランティアセンター

淑徳大学はこれまで同窓会のネットワークや現地の皆さんの多大なる協力のもと、“3.11を風化させない「できることをいまここから」をスローガンに”災害・復興支援活動を継続してきました。

東日本大震災の発生から10年という節目に、東日本大震災復興10年TOMOIKI企画を実施しました。

これまでのご支援とご協力に感謝するとともに、支援活動を通して得られた経験や学びを今一度振り返り、これからも学祖の思い（利他共生の精神）を継承していくこと、忘れてはいけないこと、風化させてはいけないことを心に刻み、各地で起きる災害に互助・共同することや備えについて、皆さまと共に考えていきます。そして、本学教育・研究活動および地域貢献活動の更なる充実を目指します。

【東日本復興支援10年TOMOIKI企画特設ページ掲載内容】

１．学長あいさつ
２．特別インタビュー
３．特別対談
４．パネルシアターキャラバンTOMOIKI企画オリジナルストーリー　他
５．復興支援への取り組み報告
６．淑徳大学から思いをつなぐ。つなげる。（卒業生・教員からのメッセージ）

学長あいさつ
東日本大震災から10年を迎えて

東日本大震災から10年を迎えようとしています。犠牲になられた多くのみなさまのご冥福を改めてお祈りするとともに、被災された方々が少しでも早く通常の生活を取り戻され、心の安寧がもたらされますようお祈り申し上げます。

淑徳大学は、「together with him.」という学祖の思いを受け継ぎ、開学以来培われてきた利他共生の精神を礎に、実学教育の伝統のもと支援活動を行って参りました。

このたび、震災から10年を迎えることにあたり、多方面からのご支援とご協力に感謝するとともに、震災を通して得られた経験や学びを社会に広く発信していくことを目的とし、「東日本大震災復興10年TOMOIKI企画」を実施することにいたしました。

この企画を通して、震災以降の本学が活動してきた多方面の取り組みを振り返り、被災地の今、10年の変化を現地の様子や現地の方の暮らしや思いを知りたいと思います。そして、忘れてはいけないこと、風化させてはいけないことを確認し、さらに各地で起きる災害について、被災者と支援者と言う区分ではなく誰もがどちらにもなり得ると言うことの中で利他共生に思いをいたす機会としたく存じます。

あらためまして、本学の活動をさまざまな形でご支援いただきましたみなさまに心から感謝を申し上げると共に、本学が目指す社会連携、地域人材育成を議論し、自治体・産業界・関連団体等と密接に連携し、持続可能な地域社会の創生に貢献したいと思いますので、今後の本学の取り組みについて、ご理解とご支援をお願い申し上げます。

2021年３月
淑徳大学　学長　磯岡　哲也

特別インタビュー

インタビュアー：大乗淑徳学園　理事長　長谷川　匡俊（震災当時　淑徳大学　学長）
撮影日時：2021年２月16日（火）
撮影場所：淑水記念館２階・同窓会サロン
形　　式：インタビュー形式
掲載方法：淑徳大学　東日本大震災復興10年TOMOIKI企画　特設サイト
特別インタビューURL
https://www.shukutokuuniversity-tomoiki311.jp/

インタビュー内容：

１）3.11の震災当時のおもい

発災した時に、私は千葉キャンパスの15号館という高い建物の８階におりまして、来客の方をお送りしようとした時に、大きな揺れを感じて、これはただ事ではないなと思ったのが最初でした。テレビ、その他で被災地の惨状を拝見するにつれ、何とかできないものかというはやる気持ちがありましたけれども、何よりも足元の事、目の前の事をまず対応していかなければと。卒業式が４日後に控えておりましたので、卒業する学生の身になると、このような状況の中でどれほど気持ちが動揺しているのだろうか。また、在学生の新年度以降のことを考えると、これまた気の重い課題であるなと。そして、被災地の卒業生へのみなさんへの思い、４月に入学してくる新入生への思い、そういった差し当たってのことに対する対応をHP上に「学長メッセージ」として次々と発信いたしました。そこに書かれていることが当時の私の思いでもあったわけです。そういう中で、実際に被災地に出向いて行ったのは、ゴールデンウィーク中の５月３日でした。初めて被災地に入り、その惨状を目の当たりにして、これはもはや何をするというよりも、祈りを込めて亡き方々への慰霊の機会にさせていただこうと、それが僧侶である

私の勤めでもあるなと思いまして、惨状の只中に足を踏み入れて、合掌しお勤めをさせていただきました。終わってふと後ろを振り向くと何人かの方が手を合わせて、一緒にお勤めに参加してくださっている、これは共に犠牲になられた方々への思いが寄せられているなと感じました。そういう事から始まった3.11への私自身、そして淑徳大学のさまざまな支援の活動であったと思います。また、それを受け入れてくれた被災地の卒業生の方々、その方々を仲介役として現地のさまざまな組織と連携をしながら、ボランティア学生の受入れも多少ギクシャクした時期もありましたが、その後幸いにして、継続的にボランティア活動ができたかと思っております。

私が被災地に出向いて、最も強く感じ、学んだことは、一言でいうと被災地の復旧復興は生きているものだけでは到底成し得ない、亡き方と共に復興に向けて歩んでいくと、そういう思いを現地の方の話を伺い、また状況の中で私自身が学んだことです。それを淑徳大学の建学の精神「利他共生」に則していうと、生者と死者との共生「生死共生」であると。これが被災地の只中で私が衝撃を受けながら学んだことであります。

2）3.11から10年　今、伝えたいこと

この10年の間、それこそ被災地の方々、言語に尽くせないような厳しい状況の中で、また悲しみの中で生活の再建を図り、軌道に乗せていくという、その中で私たちが目の当たりにさせていただいたのは、人間の根源的な強さです。これを目の当たりにしたボランティアの学生たちは、自分たちが支援しているというよりもむしろ被災地の方々から励まされ、勇気を与えられたと、こういう風に語っている学生が少なくありませんでした。私もまた、支援する側ではなく、勇気をいただき、共感して、なにか自然なスタイルでお手伝いできることはないのだろうか、そういう思いにさせられてきました。これは10年一貫して淑徳大学の教職員、学生諸君が被災地の卒業生の方々と共に手を携えて来たことではないだろうかと思います。当初から一過性のものではなく、息の長い支援、派手に振る舞って取り組んでいる状況を見ていただくというのではなく、淑徳人らしい地味ではあるが、持続的に息の長い支援活動を展開していく、これが私たちの支援の在り方だと、このように考えて、10年間経過しました。それがどのように被災地の方々から受け止められているのか、また私達、すでに卒業したボランティア学生を含めて、この10年間をしっかりと総括しながら次へのバトンタッチが出来ればと思います。学生は４年間で卒業し、社会人となってもおそらく学生時代の被災地のボランティア活動は、生きていく力になっていると思いますし、また後輩の新しい学生諸君もその心を受け継いで、これからも被災地に想いを寄せていただきたいと思います。またつい先ごろ、福島宮城両県に震度６強の地震が起こりましたが、これからの時代、いつどこで何が起きるかわからない、また、コロナ禍の真っただ中にあるわけです。そのような意味で様々な災害に私たちはどのように向き合っていったらいいのか、そういうことを学ぶひとつの原点が10年前の東日本大震災ではなかったかと思います。そして、コロナ禍の渦中で、さらに学びを深めて行きたいなと強く思います。

3）本学園の未来へメッセージ

いかなる災害も、ひとたび起こればその社会、あるいはそこに生きる人間の弱さ、弱点というものが、露わになるのだなという印象があります。具体的には、今、コロナ禍で、医療のインフラの弱点が出てきている地域医療です。そのほか福祉や教育その他様々な社会制度にしても弱さがもろに出てきていると思うわけです。しかし、それらは、いくらでも克服できる問題だと思います。人間の心の弱さ、そこが私はとくに問題ではないのかなと思います。例えば、貪りや怒りや無知と言われるようなネガティブな状況、これがコロナ禍で露わになり、人と人との物理的な距離をとるソーシャルディスタンスが高じて、心の距離、心の分断や排除、差別というようなものが起こってきています。心の教育とい

う事が今叫ばれていますけれど、我々、大乗淑徳学園の特に高等教育を担う淑徳大学としては、社会貢献というような大学の使命のひとつを果たしていくことが大切ですけれども、その役割を果たす我々自身も己が心を常に振り返って見据えていくということが何よりも大切なことではないかなと強く思います。これから見えない脅威に立ち向かっていく場合には、我々の心も見えないわけですから、察する心、つまりその人の立場に立つこと自体は出来ませんが、その事をわが身に置き換えて考えてみるという姿勢は、その気になれば誰にでもできるだろうと思います。そういった他者に寄り添う、察する心、ここに「利他共生」の実践のひとつの姿があるのではないかなと思います。これは先程申し上げた医療のインフラやさまざまな社会制度のインフラ以上に難しい問題です。しかし、そのことがこれからの時代ますます求められてくるのではないかと思います。最近、私がよく言っていることですが、新しい生活様式は、新しい生活倫理の構築が欠かせないということです。生活スタイルの事ばかりが取り沙汰されるけれども、それを支える生活倫理といったような、心の持ち方を考えていくことが欠かせないのではないでしょうか。そこに淑徳大学らしさがあるのではないかと、このことを申し上げたいと思います。

特別対談
卒業生とともに10年を振り返る

実施日時：2021年１月30日
形　　式：オンライン対談
収録場所：淑徳大学　埼玉キャンパス　図書館１階　ラーニングコモンズ
司会進行：淑徳大学副学長（当時）　総合福祉学部教授　山口　光治
対 談 者：
●宮城県　岩佐 勝氏　社会福祉学部10期生
　当時宮城県石巻市大須中学校校長。震災直後から雄勝町大須小学校避難所責任者として対応にあたる。同避難所での支援活動、その後の学習支援ボランティア等の学生ボランティアにもご尽力をいただいた。
●福島県　北村 雅氏　社会福祉学部10期生
　当時福島県双葉町社会福祉協議会にて勤務。地震・津波・原発事故の中、多くの避難所等に身を寄せた。避難中でもさまざまな支援を必要とする多くの方々に寄り添い支援を続け、本学の支援活動と繋がる。
●岩手県　荻原 史乃氏（旧姓佐藤）　総合福祉学部43期生
　震災があった３月に卒業。岩手県陸前高田市出身。地震・津波で家族を亡くした。現在も陸前高田市内に在住し、介護老人保健施設の支援相談員として勤務。
掲載方法：淑徳大学　東日本大震災復興10年TOMOIKI企画　特設サイト
特別対談URL
https://www.shukutokuuniversity-tomoiki311.jp/

※この特別対談は当初現地に赴き対面で実施する予定でしたが、2021年１月７日の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の発出を受けて、急遽オンライン（ZOOM）開催となった。

東日本大震災復興10年TOMOIKI企画　特別対談内容

○**山口**：2011年３月11日、午後２時46分、三陸沖で発生しましたマグニチュード9.0という地震によりまして津波、そして原発による放射能汚染、非常に甚大な被害をもたらした東日本大震災の発生から10年が経とうとしています。

改めまして、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、本日は３人の卒業生の皆さんにお集りいただきまして、当時を振り返りつつ将来を語っていただきたくこのような企画をさせていただきました。

被害は今なお続いて、住み慣れた地域へ戻ることができない方や新たな地域で暮らす方が、さまざまな課題を抱え、心のケアを必要とする方々もたくさんいらっしゃるかと思います。

また、雄勝などもそうですが、高齢化と少子化が災害を契機に急激に加速して、地域の活性化が非常に重要とされるような地域も多いと思います。

淑徳大学が組織立って取り組んだ災害支援は、この東日本大震災のときからと言えるのではないかと思います。この発災後、当時宮城県の大須小学校の避難所より陣頭指揮に当たっていた岩佐勝さんから、卒業生を通して大学が支援要請を受けました。その期待に応えるべく淑徳大学東日本大震災支援ボランティアセンターを立ち上げて、学生と教職員が現地に入るなど活動を行ってまいりました。

その後も、授業やゼミ活動、ボランティア活動などで東北の被災地へ何度となく訪問させていただき、さまざまなお手伝いと学びの機会を持ってまいりました。

当時現地でお仕事、あるいは生活をされていた３人の卒業生、宮城県の岩佐勝さん、岩手県の荻原史乃さん、福島県の北村雅さんにご協力いただき、震災当時の様子と10年が経過して地域や人々の心がどのように変わったのか、あるいは変わっていないところもあるのではないか、など率直にお話をお聞きし、未曽有の大災害を経験した私たちがこれからをどのように生きていくのか、また大学としてどのようなことができるのかについて、皆さんと一緒に考えてまいりたいと思います。

一言に被災された体験と言いましても、北村さんから事前にいただいたお手紙の中にも書かれておりましたように、地震、津波、原発事故の被災者はそれぞれ違います。理解する努力ができても、その人の身になって考えることは難しいです。被災した人が体験されたことは異なりますし、一人ひとりが体験したことをどのように受け止めていらっしゃるのか、また意味付けていらっしゃるのか、全く異なると思います。

本日は、卒業生３人のお話を伺いながら、お気持ちに少しでも寄り添えることができればと思います。

それでは、自己紹介を兼ねて当時のご様子なども自由にお話をいただければと思います。

○**岩佐**：震災から10年が経ったというよりも、そんなに経ったのかなと思いますが、震災当時、大須中学校の校長をしていました岩佐勝です。

震災があって、避難所の運営や、学校の職員ですので、学校のことをしていました。避難所の運営でいろいろ困ったり、避難所の人たちも困ったりしていたときに、淑徳大学と繋がりまして大変大きな支援をいただいたと思います。

大須中学校に勤務したあと、母校である山元町立坂元中学校に勤務して、そこを退職して教員生活が終わったのですが、その後、山元町で防災拠点交流センターを立ち上げることとなり、そこの立ち上げと、所長として施設の運営を行い、去年の３月に退職しました。

現在、たまに防災研修会の講師を頼まれます。家の近くに震災遺構「中浜小学校」というのが去年

の９月にできましたので、そこの語り部として月２回ぐらいボランティア活動でお手伝いをしています。

○山口：発災後の混乱の中で、避難所の運営も大変ご苦労があったとお話を伺っておりますし、そういう中でかえって邪魔ではないかと心配しながら、本学の学生、教職員が10班に分かれて４月下旬から活動に入らせていただきました。お役に立てたのかどうか、後ほど学生へのメッセージということでもいただけるとありがたいなと思います。

○北村：皆さんこんにちは。北村雅と言います。

私は、福島県の双葉郡双葉町の生まれです。福島県は会津、それから中通り、浜通りと３地域に分かれておりまして、気候風土の全く違った地域で一つの福島県として成り立っていると思います。

双葉町は、浜通りのちょうど真ん中に位置すると思います。南はいわき市、北は南相馬市、相馬と、そのちょうど真ん中に私の町は存在しております。ここ１年、10年前のことを思い出すタイミングがあまりなくて、今回こういう機会をいただいたこともありまして、今振り返っている最中です。

当時私は、双葉町の社会福祉協議会、高齢者のデイサービスセンター部門で勤務しておりました。建物そのものは平成13年ぐらいにできた建物で、１階が社会福祉協議会の事務局、それから健康増進センター、小さなプールを備えていました。２階がデイサービスセンターというような建物で、自然災害がきても恐らく大丈夫だろうというような建物だったようです。

10年前の３月11日の２時46分は、デイサービスセンターで、一番利用者さんが多い時でした。迎え、食事、お風呂と滞りなくサービスを提供できて、午後はリハビリ体操と称しまして、各々に沿った体操をする時間でした。普通ベッドで過ごされる方は移動しないのですが、たまたまその日に限ってフロアから出て体操をしましょうと上司の意見がありまして、それが結果的には難を逃れたと思います。

体操の当番が私だったのですが、始めたときにすぐ地震がきました。当時私は宮城県沖地震が一番大きな地震だと思っていました。でも、あのときの地震はその何倍も20倍も、そんな大きさだったと思います。

先ほど言いましたけど、建物は頑丈にできていました。２階は太陽が当たるところは総ガラス張りでできていました。波打っていました。壊れて粉々になって、それに突き刺さって死ぬのだなというのが第一印象というか、冷静に受け止めていたのかどうかわかりませんけど、あっ、死ぬのだなっていうのが、あの日、あの時間に感じた率直な、素直な気持ちだったと思います。

お陰様で、建物そのものには被害はなかったです。ただ、海の方は全部津波にやられました。町民の方の避難所と、それからデイサービスセンター利用者さん、その日家に帰れなかったですから、その人たちも一緒に３月11日の夜は過ごすことになりました。

外がどんな状況なのか私は全くわかりませんでした。ほとんどの方は、地震だけですぐ戻って来られるだろうと、安易な気持ちだったのではないかと思います。しかし、原子力発電所の方で水素爆発が起こったということで、私たちも12日の夕方、県の方から強制的に避難しなさいということで避難することになりました。福島県の川俣町に夜の９時30分頃に着き、その日から今まで避難生活が続いているということになれば、ずっと続いているのでしょうけども、デイサービスの利用者さんとの避難生活は、それが出発だったと思います。

○山口：デイサービスの利用者の皆さんと、そこから過ごされたのでしょうか。

○北村：実際は、54名のうち４名の方はご家族の方が迎えに来られたのだと思います。

道路状況も寸断されていましたし、次の日、私どもの社会福祉協議会で持っているデイサービスセンターのバスとか、特殊車両とかで、３月30日、さいたまアリーナで、デイサービスセンターの利用者さんは、ご家族の方にお引き渡しをしたと記憶しております。

○山口：福島から埼玉の方に。住民の方も含めてでしょうか。

○**北村**：いえ、デイサービスを利用していた方々です。私は福島県も３カ所、同じ川俣町でも、川俣町と川俣町の町内。うちの上司の方が高校の体育館では利用者さんが難しいということだったので、町内の別のところに移って、あとは社協の職員がいろんなところに行っていました。避難者と一緒に行っていたので、郡山の養護学校に私も行くことになって、高齢者の方たちの介護もあり、途中19、20日にさいたまアリーナにというような経路だったと思います。

○**山口**：さきほどお話いただいた岩佐さんは、地域の中の避難所の運営に、一つの場所を中心にということでお話されていましたが、北村さんの場合はむしろ利用者の方に合わせて職員として移られて、あるいは分かれて関わっていらっしゃったということで、同じ場所でずっと長く避難しておくことも難しかったということですね。

○**北村**：そうですね。あとは、皆さんご存じのように、あの当時双葉町の首長は、県外避難ということを視野に入れたようでしたので、経路的には福島県から埼玉県の方に移っていきました。役場機能が移動するということは、社会福祉協議会もそれに付随したということになります。役場と一緒に移動していきました。

○**荻原**：私は当時、淑徳大学総合福祉学部社会福祉学科４年生で、卒業式前にお休みもあったので実家に帰省していました。３月11日は自宅にいました。特に被災はなかったのですけれども、父親が当時市役所職員で避難誘導している際に、そこ自体も被災し、流されてしまったというような状況でした。住んでいるところは、岩手県陸前高田市というところで、テレビで言う一本松がよく放映されている場所です。

人口自体は、約24,000人。津波で被災されて亡くなった方は、約1,700人いました。ほとんどの町が津波で全壊、津波でかぶってしまって残らなかったというような状況です。

当時自分も含めて７人家族だったのですけれども、そのときに被災しました。そのときには津波がくると思いませんでした。父親からも無事だというような連絡がすぐ入ったので、大丈夫だと思っていました。夕方になってライフラインや、水道も全部止まって、携帯電話も使えなくなってしまったのが不思議ではあったのですが、なぜかわかりませんでした。夕方ぐらいにラジオをつけてみたら、もう津波がきて町が壊滅状態ですという放送でした。その状況自体がまず信じられない。その数日前にも地震がきて、津波もそんなに高くなかったので、皆さんそういう意識だったのではないかと思います。

その後、ガソリンも手に入らなかったですし、町そのものがなくなって、買い物ももちろんできない。今後の生活をどうしたらいいかとみんな思っていましたが、近所の方が声を掛けてくれたりしてなんとか生活はできてはいました。私は自宅が無事だったので、なんとか生活はできていたのですが、海の近くの方は家自体がなくなってしまって、もっと大変だったと思いますし、家族の安否も心配だったと思います。翌日には祖母のお姉さんも自宅に避難してきて、一緒に行動をしていました。

余震も続いて、いつでも逃げられるようにしていて、玄関の近くで雑魚寝するというような状況でした。家がない方は体育館や公園など、皆さんで避難していたというような状況だったようです。

避難所のところに私も父を探しに行ったのですが、住所や名前が書いてありまして、誰々はここにいますよというのが一覧で並んでありました。そこから自分の知りたい方を探すというような状況でした。もちろん生存者の方で載っている方もいれば載ってらっしゃらない方もいました。あとは安置所もあったのですけれども、そちらに探しに行っていました。

ただ、何千人もいらっしゃり、流れ着いて違う県の方もいらっしゃったような状況なので、入れるところがなくて、被災して亡くなられた方が、ビニールに包んであるような状態でした。遺体そのものがない方もいらっしゃいましたし、家族のところに帰ってくることが本当にありがたかったなと。探してくれた方もいっぱいいました。そういったところがありがたかったと思います。

家族もいなくなってしまったので、就職もどうするかをそれぞれ悩んではいたのですが、４月にちょうど陸前高田市の老人保健施設の方から声を掛けていただいたので、そのまま就職させていただきました。当時老人保健施設の松原苑の方で介護職員として働いていたのですが、松原苑自体も被災してしまったので、大船渡の姉妹法人の気仙苑に松原苑の方は行かれまして、私もそちらの方で介護に携わっていました。その当時物資が全然届かない状況で、十分満ち足りた介護っていうのはなかなかできなかった状況です。

今現在は、松原苑で支援相談員として勤めさせていただいて、そのときの家族の状況などを相談に来る方から伺ったりすることはあります。

私は卒業証書も取りに行くことができなくて、先生が届けてくださり、大学の方にもすごくご協力いただいて、感謝しています。その当時、ご遺体を拝んでいただく当たり前のことができなかったのですが、長谷川先生に自宅の方に来ていただいて、父も拝んでいただけたので涙が出るぐらいありがたかったです。祖母もちょっと認知症ではあったのですが、未だに学長が来られたことはよく話しているので、よっぽど心には残っていたのだろうと思います。

当時常に模索しながらだったので、今やっと落ち着いてきているとは思います。

○**山口**：お辛いことを思い出させてしまったところもあるかなと思います。

当時の長谷川学長先生が、ご自宅の方に訪問したというのは、私も聞かせていただいておりました。陸前高田出身の職員の方もいて、できることではございますけれどもさせていただいたということを報告受けております。

これから社会に出て働こうという矢先に災害があって、大変不安といいますか、大きなご心配もあって、そして４月どうやって生活していこうかと非常に悩まれた。あるいは先がなかなか見えない中で非常に不安だったのではないかと想像をするところです。

本当に３人の方それぞれですね。お仕事をしながら、あるいはプライベートなところでも非常に大きなできごととして震災に出遭っていらっしゃるということが伝わってまいりました。

そこからこの３月で10年が経つということで、振り返っていただいて、当時混乱の中で、あるいは無我夢中で毎日を過ごしていくことで一杯だったのではないかと思いますが、時を経て今どのように体験をお感じになっているのか、お話いただきたいと思います。大切なお父さんを失われたということ、それから社会に出てから老人保健施設でお仕事されている中でもさまざまな混乱があって現在に至っていると思いますが、荻原さんいかがでしょうか。

○**荻原**：当時は、父の状況とか町の状況が知りたいと思いながらも、自分の気持ちがどうしても受け止めきれなくて、気持ちの整理もできなくて、前には進めないところはありました。実際は津波の正しい知識を持っていれば被害者の方っていうのは減ったのではないかと思います。

震災後、この三陸の近くで言われているのが、「津波てんでんこ」という言葉です。これはまず自分の命はなんとしてでも自分で、高台に上がるなどして守りましょうという意味です。最初に津波がきた後に、二波三波で継続して津波っていうのはくることがあるにもかかわらず、家族を探しに戻られて亡くなられてしまった方も多かったです。

自分の命は自分で守らなきゃいけないし、ほかの家族も生きているということを信じることが大事と思いますし、災害にいつでも備えられるようにすることは必要と思います。

陸前高田市は町そのものがなくなってしまっているので、そこの場所に住むことはできないです。一からの復興なので土台を作るだけでも時間がかかってしまって、まだ市役所とかも建ってないような状況です。やっと仮設住宅もなくなって商業施設とかが建ち始めていますが、復興自体が、やっとスタート地点に立ったような状況で、今度は自分たちが住みやすいような町をつくっていく必要があると思います。

10年経って、なくしてしまったものの方が多いので、心のケアというのもまだまだ必要なところはあると思います。あとは３月11日が近くになると、また津波がくるのではないか、地震がきたときにどうしようと思うところもあります。

○**山口**：荻原さんから見ての復興、今、町が変わっていく、そういったところを住民の皆さんがつくっていくというお話もあったかと思いますし、心のケアというところでは、10年経ってもまだまだ整ってないといいますか、荻原さんご自身のお気持ちの部分ではいかがでしょうか。

○**荻原**：個人的には10年経ってもなかなか気持ち的に前に進めてないような現状ではありますが、周りの方に支援をいただき、なんとか気持ちも保っていますし、町並み自体が変わってしまっている、元々生活していたところの町並み自体がもうないので、どちらかというと別のところの地域を見ているような気がしてならないところはあります。当初の自宅の方が元々何も被災してないので、その町並みから被災しているところに来ると、今も違和感はすごくあります。ただ、当たり前の日々がその通り続いているので、それはありがたいと感じています。

○**山口**：続いて岩佐さん。この10年というところをどんなふうにお感じになっていらっしゃいますか。

○**岩佐**：最初の３、４年は全力で走ったような気がしていました。特に教員だったということもあるのですが、大川小学校が雄勝のすぐそばで、当時勤めた大須中学校の職員の子供さんも含めて、学校で74名もの子供さんを死なせていいのかというようなことで私の中では苦しみましたね。なんとかできなかったのかな、いろいろ思ってずっと過ごしてきました。

あと裁判にもなったのですが、すぐ南側にお墓があって、そこに登り口があるのですけど、階段すら付いていない。大川小学校のある地域のすぐ北側に追波川という大きな川があるのですが、あの川が津波じゃなくて氾濫してきたらあの地区の人はどこに、どういうふうに逃げるのかというのをなぜそれまで考えていなかったのか。

あるいは、もし南側のお墓に抜けるところに階段があったら、とりあえず登ろうとなったと思いますし、多くの人たちは大川小学校の学校の問題というふうに、私も当初はずっと考えていたのですが、あれは地域の防災意識の低さが根底にあったのではないかなと思います。

そういうことから言うと、荻原さんの話を聞いてびっくりしたのですが、三陸海岸の辺りっていうのは、昔から「津波てんでんこ」はあるし、津波は山へというのもありますよね。大きな津波がきたら、さらに奥へ奥へと逃げられますよね。それで津波は山へというふうになったと思うのですが、陸前高田の町っていうのは割と平野が、海岸から山までの距離が長かったのでしょうか。

○**荻原**：私も海から距離があると思っていたのですが、何もなくなって地元を見ると、かなり海が近かったです。町があったから逆に見えなかったというようなところもありました。皆さんが逃げたところというのも町の真ん中ぐらいだったのですが、海の方から津波がきて、川の方からも上がってきて、ダブルで挟まれてしまって津波全体が渦を巻くぐらいの状況でした。さらに町の奥に逃げるとなると、ご高齢の方はなかなか上がれない。あと交通状況は、ライフラインがストップしたことによって渋滞が起きていました。

○**岩佐**：今、宮城県の山元町というところに住んでいるのですけど、津波避難道路を町内に幅広い道路をつくりました。山に逃げるといっても渋滞したり、途中に国道が挟まっていたらそこの信号で止まったりね。いろんなことで渋滞しますよね。そういうふうに渋滞しないような形でのことを考えて避難道路を10本整備しました。

それをしたからといって、完璧に逃げられるかどうかはわからないですが、もう海岸にほとんど家がないので、そんなに海岸にいる必要もないと思うのですけど、そういうような整備を考えていますね。

だから、津波は山へと一言で言っても、その土地の状況とか、信号がどういうふうに入っているかとか、いろんな細かい状況で山へ逃げられないですよね。だから防災というか、減災って考えたとき

に難しいことがいっぱいあるとずっと思ってきました。

大須小学校避難所に７月30日まで関わっていました。最初のうちは地区の人たちで自分たちのことは自分たちでやろうと、みんなで頑張っていましたけど、途中から疲れてくる。頑張るということは長く続かないですよ。

疲れたときに淑徳大学とうまく繋がりました。長谷川学長先生には遅くなってすまないと言われましたけど、私からすればそんなこと全く感じませんでした。いいタイミングで支援に入っていただいたと思っていました。

学生が切れ目のないように４泊５日で交代して入ってくる。そういう支援の在り方にしてもほかの大学ではないような素晴らしい取り組みをしたと思っています。短い期間ですけど、学生さんが入ってきて帰っていくまでの間に顔の表情が変わるのでびっくりしました。締まってくる。すごいなと思いましたね。

雄勝はかなりやられましたので、そこを見て、あと大川小学校の子供さんの亡くなった様子を知るにつれて、いろいろ考えることがあったにしても学生さんが被災地に入って実践を行うのは、教育力があるとすごく感じさせられたことでした。苦しかったですけど、そこは嬉しく思っていました。

山元町の防災拠点交流センターに勤めましたが、そこでも３年のうち４回避難所を運営しましたけど、全部１泊２日でした。短期での避難所と長期での避難所で違うし、いろいろな避難の仕方があるなと勉強になりました。

○**山口**：岩佐先生は避難所の運営もされて、大川小学校の件もお話されていました。防災とか減災教育というところで、本学の在学生にも学ぶ機会を与えていただいてきました。非常に残念な結果が、教育の問題として、教育も学校の中だけではない地域の住民も含めての防災教育、減災教育の必要性というところを非常に強くお感じになり、この経験があって、行動を起こさせているのだなということを今改めて感じたところです。

また学生は４泊５日で引継ぎをきちんとして、活動の期間は短かったかもしれませんけど、切れ目のない活動をということで、宿泊先も遠くだったので、移動時間もかけて活動させていただきました。学生の顔が変わるっていうのは穿った見方かもしれませんけど、そこで成長していってくれたのかなと、学ぶことが多かったのかなと思っております。

災害は起きないにこしたことはないですけれども、即行動を起こせるような学生を育てていきたいと、今お話を聞いていて感じました。ありがとうございました。

○**北村**：私と岩佐さんと何が違うかというと、岩佐さんは陣頭指揮を執る立場で避難所を開設し運営ということで、私の場合にはどの場所でも上司がいました。上司の判断で指示されて動くのと、自分で考えて判断してというのは、かなりの差があると思います。私は10年経過して、自分を見たときに、上に立つこととかは多分できない。いろんなものが備わってないと思いますから、一連の避難行動も指示されたから私はできたと強く思っています。

ただ、騎西高校から避難生活を始めるのですが、双葉の町民は元気で笑顔を持っているとか、持たせていただくとか、前に進むようにとか、そういうことの手助けは上の指示じゃなくて自分の判断や、パーソナリティーにてできたというのは、私にとっては本当に良かったと思います。

原子力発電所というのは、事故が起きないって、神話ですよね。起きないと思っていました。だから津波がきてもここまでこないというのと、現象は違っても気持ちのうえでは同じだったのかなと。奇しくも2010年の７月に福島県の淑徳大学の同窓会が私の隣の浪江町で開催されまして、２日目に原子力発電所を見学しました。そのときに参加していた方が消防署勤務だったので東京電力の職員に有事があったらどうするって聞きましたが、いや、そういうことは絶対ありませんからというのが答えでした。そしたら翌年の３月に事故が起きました。想定外と言ってもやはり想定内のところもあるだ

ろうなと個人的に思いました。だから、絶対にないというのは多分ないと思いますよね。

この10年、色々な方とボランティアの方と知り会えてお世話になったというのが思っていることです。数年前までは地震、津波、原発事故で被災された方で一番ひどいのは自分たちだという思い込みがありました。

淑徳大学の小林先生の震災ツアー等々に参加させていただいて、あとは県内に個人的に入ることが多くて、農家で風評被害があり売れなくなったとか、野菜をつくってもみんな廃棄処分でしたとか、海の方に行くと漁業ができなくなったということを直に聞いて、福島県内の方は地震と津波と原発事故でほとんどの方が被災されたと自分で気づきました。そういう経験をして、自分たちだけじゃないという思いが強くなったのは、この10年の少し成長したところだと思います。

双葉町の現状は、今42都道府県に双葉町の方は避難されています。人口が大体約7,000人弱の人口でしたから、そのうちの今4,000人が福島県内に住んでおられます。2,800人が福島県外ですね。これはもうここ４、５年数字的には変わっていません。

あとは、毎年町民の方にアンケートをとりますが、これもここ何年かは数字的には変わっておりませんで、戻りますという方は10％前後ですね。ちょっと悩んでいるというのが大体20％ちょっとくらい。もう帰りませんという方が６割弱の数字は変わってないのが現状です。

今この時点でも私どもの町は帰宅困難区域で、私の住んでいたところも含めてまだですね。ただ、やはり町でも復興拠点をつくってなるべく人口を双葉町に、いろんな整備をして住んでもらうという計画で進んでおりますので、その数字はもしかすると、帰りたい、もう帰ったよ、そういう数字が増えていく可能性も秘めていると思いますけども、現状はそんなところと私は捉えております。

常磐線が再開されて双葉町の駅が立派になりました。国内外には震災と原発事故を忘れないために伝承館というものができたばかりですね。あとは、町の交流センターがそこにできましたけども、そういうニュースが流れてきて、例えば岩佐さんから、良かったな、駅も立派になって電車通るようになったね、なんて言われると、もうそれはそれで納得しますね。ただ、そういうものができてきているのと同時に、だんだん私が双葉町から遠ざかっているような気もします。これは私だけじゃなくて町民の方が大きいか小さいか別にして同じような思いをしているのが、今の現実なのかなって、10年経ってそんな感想を持っています。

○**岩佐**：全国的に原発は安全だと言われていましたけど、私は絶対危ないと思っていました。長いこと社会科の教員でしたが、そのときの中学生には、原発は危ないと言っていました。だから私の頭の中では絶対大丈夫だというのはないと思っています。

だから、絶対大きな津波はこないというのもないと思いますしね。大きな津波が起きて原発が駄目になるとかね。

あと、いわきや水戸の方まで車で行くのですけど、双葉とか大熊町ですかね。あそこを通ると黒いビニールに包まれた原子力発電所の関係の廃棄物がいっぱい並んでいる。あれ見るだけで北村さんは帰りたくなくなるよなと思っていました。そういう面では、大変だったと思っています。

それから最初の頃に話が出ましたけど、北村さんが当時の社会福祉協議会の上役であっても、北村さんはできたと思います。たまたまの立場っていうかね、それで動かざるを得ないところもあるので、今後とも頑張って欲しいと思っています。

○**北村**：当時、淑徳大学を卒業する佐藤睦美さん、渡辺ゆかりさんという職員がいまして、当時2011年の４月には双葉町社会福祉協議会に入職する方が３人いました。佐藤睦美さんは、卒業間近で大熊町に帰ってきていました。それでお父さんたちと一緒に県内に避難していて、社協にも内定していました。それで埼玉県の騎西高校の事務所に来るなんて、想像していませんでした。

それだけでもすごいなと感じましたし、卒業生が３人、小さな社会福祉協議会にいるのはすごいこ

とだなと思いました。埼玉キャンパス、山口先生がいらっしゃるときにもお世話になったのも含めて、渡辺ゆかりさんの同級生や同期もいっぱい支援してくれました。あのとき、大学や大学当局から、それからOBも含めて支援があったというのは、本当に幸せだったなと、今もことあるたびにそういう話になります。

炊飯ジャーとお米を届けていただいた。あれはあくまでもデイサービスセンター用というよりも、一般町民の方が風邪、インフルエンザ、子供からお年寄りが食欲を失くしていたのでどうしたらいいのかなと上の人が相談したら、炊飯ジャーが欲しいということになったらしいです。うちの上司は本当に感謝しているということで、山口先生に重ねてお礼言ってくださいと言われましたので、それだけは忘れないように言いました。

○**山口**：ありがとうございます。

当時私埼玉キャンパスにいました。もちろん埼玉でも揺れがあったし、鉄道も止まり、大学もスクールバスも軽油がなくて動かないとか、卒業式、入学式全部中止ということで、そういう中で、何か応援できることないだろうかと。ただどういうルートから支援したらいいのかっていうようなことも大変悩んだことを覚えています。

そういう意味では、卒業生の方々、同窓会組織が東北ではしっかりあったということもあって、埼玉の方から行きますということで、家電量販店に駆け込んで、全部くださいと。お米屋さんでお米を買ったことを今思い出しているところです。

やはり、行動を起こすところが本学のいいところかなと。もっともっと活発になるといいなと、今北村さんのお話を聞きながら、考えたところであります。

○**岩佐**：淑徳大学は全国から学生が集まっていますが、その同窓生が北海道から九州までいまして、福島県の当時の同窓会の会長の細谷さんとときどき連絡は取っていました。細谷会長が動いてくれて大学と繋いでくれたというのは聞いています。同窓会の皆さんには頭が下がる思いです。

それから雄勝に最初に来ていただいたのが、磯岡先生と山口先生のお二人です。それで、大学で応援してもらえるかなと思って、二人の顔を見たときに少しほっとしました。その後一気に動いたんでね。

○**山口**：ありがとうございます。

今出ていた同窓会の諸先輩方のお力というのは、ものすごいと思っていますし、細谷先輩には叱咤激励いただいて、大学が最初から組織立って災害支援をする仕組みというのは、当時なかったですね。ですので、先駆け的に迷いながら先遣隊として、磯岡先生と私の方でまず現場を見て、どういう形で学生を送り出せるのかというようなことで行かせていただいたことを思い出すところです。

岩佐先輩がいらっしゃったということはもちろんですけど、被災された方のために役に立てることを、行動したいっていう思いが学生、教職員にもあってのことで、決してボランティアを義務化してではなく、手を挙げた皆さんに気持ちよく参加していただいたということができたのも、同窓会の皆さん、あるいは岩佐先生のご尽力と思っております。ありがとうございました。

学生の皆さんに対して、あるいは大学という組織に対してこの10年のご経験を踏まえて、ご体験を踏まえて、ご提言いただきたいと思います。

○**北村**：私が卒業してもう40数年で、先生の方に今の学生、取りも直さず淑徳大学生の、学生気質というのはどんなのかとお聞きしたいと思っております。

私が大学に在籍した４年間は、サークルは日本傳拳法道部に所属しました。１年生と４年生のときに学費値上げのストライキがありました。私は普通の一般学生で参加していた部分もあります。あと、合宿費のために、アルバイトはやりましたけども、継続的には、アルバイトはしていませんでした。

なんでもないこの４年間が結果的には、岩佐さんも言ったように、ずっと繋がりを持てたなというのがあります。今回も大学の方にもいろんな形で顔を出せていただく機会もありましたし、日本傳拳法道部のOB会も２年ごとにやって、幹事で働かせていただいている。アナログな人間でいろんなものを使いこなせないけど、それでもやってきたと思いますし、あと昭和49年から52年頃は学校の設備が整っていたわけでもないと思いますね。でも、それで何か物足りない、これがないと駄目だということもなかったような気がします。

あとは、何でもそうですけど、経験するということなのかなと思います。自分が今回みたいに何か災害にあったときに、横のラインで助けていただくことがあったということは、逆に言えば少しだけでも助ける一員になれることがあるじゃないかと思うことは、大事だと思っています。

学生生活でも目の前の課題をとにかく克服していくということですね。あとは友達をいっぱい作るとか、先生とコンタクトを取れるとか、そういうことも今後いい方向にいく、自分を高めていく要因になると思っています。

大学に期待することになりますと、毎年学校から機関誌が送られてきて、社会福祉士の国家試験、合格率や支援学校の合格率などは伝わってきますし、そこに関わっている先生たちのご努力、それから学生さんたちの努力、これはもう計り知れない。すごいなと率直に思っております。

淑徳大学だと共に生きるということが基本理念だとすれば、どんな立場になっても、どんな仕事に就いても、共に生きていくというような教育を、この４年間にいろんな講義とか、実践、実習を含めて、そういう人間教育をしていただけるようなことがあれば、その学生さんは大きくなっていくと思っています。

あとは、先ほど山口先生、岩佐さんがおっしゃったように、日本全国で自然災害は日常茶飯事に起こるだろうと想定がされますので、そのときには学校が強い姿勢を示す。それで学生さんもすぐに行動ができる、帯同ができるような体制をもう一度見直して、漠然としたものじゃなくて組織的なものがいつでも有事の際に動けるような、そんなシステムがあって、あとは全国に散らばっている同窓生がそこで動ける、支援ができるような、そんな組織体制ができたらいいなと個人的には思っております。

○**山口**：淑徳大生気質というのはなんと表現していいのか、北村さんの時期は学生運動的なものが活発だったと思います。言い方が悪いですけど、体制に反発して行動を起こすというような、学生さんは今は少ないという気がいたします。逆にそういう意味では、主体的に行動できる学生を増やしていきたいと思っております。

何でも経験していく、目の前の課題を克服していけるような学生であって欲しいと思います。

また、組織的に動いていく、そういう意味では、この10年前の経験を次のステップに繋げていかなければいけないし、毎年のように台風等の被害も起きていますので、そういったことを他人事として終わらせずに、できることを行動していける学生を育てていかなければいけないと思っております。

○**岩佐**：北村と私も同じこと言っていると思います。学生の皆さんには防災力を高めて欲しいというのは同じですし、いろんな災害がありますけど、その災害があったときにどこに逃げるかぐらいは自分で考えておいて欲しいし、できればもっとレベル上げれば避難所の運営ぐらいはできるようにしておいて欲しいです。大学にお願いしたいのは、大学としての防災の力を高めて欲しいと思います。大学としての防災力を上げれば、地域全体からも信頼される力がすごく高まると思いますし、災害があって困ったら淑徳大学に逃げればいいと地域の人たちが思えるぐらいになれば、これはもう大学としては最高ですよね。

あと、私個人的には防災向けの集会でお話していますが、避難所の運営として日本ぐらい粗末な運営はない。体育館に何人も詰め込むような避難所ではどうしようもないなといつも思っています。震

災で電気が切れて暖房が使えなくなっても、自分のところの自家発電機で建物を温めるぐらいの避難所ができて欲しいです。

誰でも楽に過ごせるような、ユニバーサルデザイン避難所といいますか。そういうような避難所が日本ではもっと普及すべきだと思うし、障がいを持った人もその避難所に普通に避難できるような、福祉避難スペースのある避難所など、避難所がもっと良くなればいいなとずっと思っています。

学祖の長谷川先生が考えたように、「利他共生」が震災のときは絆という言葉で全国的には広まりました。そういうことでの人づくりは淑徳はよくやっていると思っています。山口先生もしっかりやっているので安心ですけど、先生も含めて皆さんにそんな学生さんを育てて欲しいなと願っています。

○山口：卒業生の皆さんにもぜひ学生を一緒に育てていただけるとありがたいなと思っております。ありがとうございました。

○荻原：震災のときに思ったのが、家族とご飯を食べたり、友達とお話する日常とか、家があって、電気や水道があって、普通に生活できるということ自体が、どんなに大切なものなのか、感じました。何もない日常を暮らせることが本当に素晴らしいことだと思います。

震災のときは、生きたいと思って逃げたと思うのですが、それが叶わなくて亡くなってしまった方もいらっしゃいました。自分の命というのはとても大事にしていただきたいと思います。

例えば商業施設にある避難図がどういう感じなのかを意識したことがなかったですが、震災になってからはどこの方向に逃げたらいいのか、建物の中にもその避難図が大体はあるので、ちょっと見て、あとは階段を確認することが多くなりました。そういったところに意識を向けるのも一つだと思います。

もし起こってしまったときに、何も準備してないと混乱してしまうと思います。懐中電灯は準備した方がいいのかなと思います。私の場合は手を自由に動かしたいので、頭のところに付けるヘッドライト。場合によっては、道路に釘とかが落ちていたりすると、長靴が必要だったり、あとは防寒で新聞紙とか使ったりした場合もありました。あとは携帯の充電器は常に持ち、自分に必要な物はあると思いますので、事前に把握した方がいいと思います。

大学の方には、今までいろいろサポートいただいてありがとうございました。今の時点で陸前高田の方でも被災を語り継ぐために、東日本大震災津波伝承館というのが建てられました。ほかの施設、ほかの県にもそういった伝承館がありますので、そういったところに一度来ていただいて、実際どういうことが起きたのかということを現地で見ていただき、あとは語り部の方のお話を聞いていただいて、今後の災害対策に役立てていただければと思います。

福祉の方でも、看護の方でも、ぜひ来ていただければと思います。

○山口：荻原さんのお話を聞きながら、当たり前に送っている生活がとても大切なことだなっていうことを感じますし、命の大切さも。また、必要となる防災グッズ、災害時に活用できる物、岩佐先生にも以前「僕はこれを持っていつも歩いています」と、見せていただきました。私も一つ二つ持ち歩いてはおりますけれども、体験してないが故に、軽視してしまっている部分もあると反省をしたところです。

また、引き続き本学でも企画をして被災地を訪ねる活動はしてまいりたいと思っております。

貴重なご体験を話すこともためらわれたこともあったかもしれません。ご協力いただきましてありがとうございました。

３人のお話を聞いて印象に残ったところを何点か、最後にまとめに代えて触れておきたいと思います。

まず一つ目は、荻原さんからのお手紙や、お話の中にもありました、当たり前に送れる日常は、とても素晴らしいことだと。改めて命の大切さを知ったと。時に辛いできごとがあるかもしれないが生

きていればなんとかなる。自身の命を大事にして欲しい。北村さんのお手紙にも、何気なく過ごした一日一日の積み重ねが現在に至っていると、先ほども大学生活を振り返ってそんなことも語られておりました。

命の大切さと今日一日を大切に生きるということ、生きていることへの感謝、当たり前のことが当たり前じゃない状況ということが起こり得るのだということでは、今を大切にぜひ学生の皆さん、我々一人ひとりも生きていかなければいけないと、感じさせていただきました。

二つ目は、皆さんのお話にありました、現地に行く、被災地へ行くこと、それから被災された方のお話を聞くこと、そこでボランティア体験をすることの意味、大学の教室の中ではない、現場で学ぶこと、そこに行かないと伝わらないことがたくさんあるということを感じさせていただきました。

誰もが自然災害に出遭っていく可能性があるわけで、他人事ではなく我が事として捉えていく。お互い様じゃないかと、互酬性という言葉もありますけれども、だからこそ今できること、どんなことならできるのかということを学生と一緒に考え、行動できたらいいなと感じております。

以前足立先生が、教室の中だけで学ぶことはできない、地域がもう一つのキャンパスであるとお話をされたことがあります。地域の方々に学ばせていただくという意味で、それぞれの地域にキャンパスがあると感じております。

そして最後になりますが、今後もさまざまな自然災害は避けられないと思います。防災、減災の取り組みを行って命を守っていくということの大切さを改めて認識したうえで、「できることを、今ここから」というキャッチフレーズで淑徳大学の学生、教職員共々が同窓生のお力もお借りして、今後も歩んでまいりたいと思いました。

十分な整理ではございませんが、皆さんのお話を聞いて感じたことを最後に述べさせていただきました。

コロナ禍が終えて、皆さんと直接お会いできることを願っております。

どうもありがとうございました。

パネルシアターキャラバン
TOMOIKI企画　オリジナルストーリー

東日本大震災の発生時から淑徳発祥の「パネルシアター」の公演を通して多くの笑顔が花開くようにと願いながら、被災地の保育所や高齢者施設の巡回を毎年行っています。

この10年を節目に「地震・防災・備え」などを小さな子どもも楽しみながら学び、今一度振り返る機会となるようにオリジナルストーリーを制作しました。

1．タイトル：「しゅくとく町」クイズ！　地震が起きた時みんなはどうする？
　撮影日時：2021年２月16日（火）
　撮影場所：千葉キャンパス
　実施協力：淑徳大学千葉キャンパス学生サークル「でんでん虫」

2．タイトル：変身！おたすけ三銃士
　撮影日時：2021年２月18日（木）
　撮影場所：埼玉キャンパス
　実施協力：淑徳大学埼玉キャンパス学生サークル「ピタペタ」

パネルシアターオリジナルストーリー作成にあたって指導担当教員へインタビュー

指導担当教員：教育学部　こども教育学科教授　藤田　佳子
撮影日時：2021年２月18日（木）
撮影場所：埼玉キャンパス
形　　式：インタビュー方式
掲載方法：淑徳大学　東日本大震災復興10年TOMOIKI企画　特設サイト
藤田先生インタビューURL
https://www.shukutokuuniversity-tomoiki311.jp/

インタビュー内容：

1）3.11の震災当時のおもい

2011年３月11日の東日本大震災は、東京でも大きく揺れました。すぐにテレビをつけてみたら、真っ黒い海の波が押し寄せている津波の映像が、次から次へと映し出されていました。それを見たときに重なったおもいがあります。2004年12月にスマトラ沖地震があり、スリランカも大津波で大変な被害に遭った国です。震災から３か月後2005年の３月にパネルシアターを担いで、パネルシアターの創始者である古宇田亮順先生を隊長にして、５～６人で１週間ほど巡回しました。その時みなさんが苦しい中で、笑顔をたくさんたくさんしてくださった、そのおもいが重なりました。そのおもいを基に、是非学生達と一緒に、被災地に元気と笑顔を届けに伺いたいと思いました。

2）3.11から10年　今、伝えたいこと

主に２つあります。１つ目は、パネルシアターキャラバンで最初の年は２回行って、その後から１年に１回ずつ訪問させていただいております。その時に感じたのが、本当に復興がなかなか進まない。１年後に行ってもまだこれだけ、と思いながら、３年目から少しずつみなさんの生活が戻り始めた。という遅々とした流れの中で、みんなに元気を届けたいと思って続けてまいりました。そういう復興の変化を私だけではなく、一緒に行った学生たちも感じて行動につなげてくれます。

２つ目は、一緒に行く学生たちが、とても良い経験をして帰ってきます。パネルシアターでいろんな場所に伺うと、みなさん笑顔とともにいろんなお話を伺ったり、私たちに「頑張ってね」と励ましていただいたりして、元気をもらう事もたくさんあります。そして学生たちは、テレビでいろんな話を聞くだけではなく、現地の人と交流すことによって、五感で感じて帰ってきます。考えてくれるのですね。僕達、私達には何が出来るだろうと、いっぱい考えてくれて、そして、いろんな現地の物に関心を寄せ、自分の声で自分の言葉で発信をする。こんな経験しているよ、みんなはこんなことを今やっているのだよ、その時の現地の様子をみんなに伝える、それがじつはとても大事ということを感じて帰ってきてくれます。それが１年１年また違う体感をしながら、感じた思いを繋げていくことが支援をすること

に繋がっているのだと思って10年間続けてきました。

３）パネルシアターキャラバンの今後について

復興で今まで10年近くパネルシアターキャラバンを続けてきました。今まではこちらから笑顔や元気を届けたいという形でのキャラバンでした。これからはもう一歩踏み込んで、現地での幼稚園、保育園、小学校あるいは中学校の先生方と一緒になって、パネルシアターを作ったり、一緒にコラボレーションをしたいと考えております。様々な教育的場面でコミュニケーションツールであったり、色々な知識や技術を伝える良い表現教材なので、現地でも積極的に活用してもらえるような形で関われたら良いなと考えております。

復興支援への取り組み報告
淑徳大学総合福祉学部　正課外講座

「現代人の生活倫理」スタディーツアー in 福島（平成28年～平成30年）ツアー報告

総合福祉学部　教育福祉学科　准教授　小林　秀樹

正課「現代人の生活倫理」の科目担当者である小林秀樹ならびに魚谷雅広は、授業での学びを深め、被災地の復興支援とともにこれからの私たちのあり方・生き方について実地において考えるスタディーツアーを「正課外講座」として行った。

平成28年に11名、平成29年に６名、平成30年に11名、三年間で延べ28名の学生が被災地を訪問することができたが、このツアーは特に本学１期生の細谷昭夫氏、10期生の北村雅氏・岩佐勝氏、13期生の佐藤修峰氏といった本学OBのみなさんのお力添えもあって実施できたものである。ツアー・研修でお世話になった他の多くの方々とともに、この場をお借りして改めて御礼申し上げたい。

まもなく震災から10年の節目を迎える。かけがえのない命と甚大な被害とを引き換えに残されたはずの教訓を、私たちは現在と未来に生かさなければならない。そのためにも、震災・原発事故を忘れず、これからも古き良き友人を訪ねるように「お変わりありませんか？」と交流し、互いに励まし合って生きていくのでありたい。（小林）

●2016（平成28）年

「パンと野菜の店　えすぺり」さんにて

大河原多津子さんの人形劇「太郎と花子の物語」

常磐道車窓から

請戸地区

複合型介護支援サービスを展開されている本学OB佐藤さんによるご講演

【学生のことば】

今回のスタディーツアーでは、日新館をはじめとする過去の福島と震災後の現在の福島という観点から人間のあり方、生き方について考えることが出来たように思う。詳しくは各報告書に任せることとするが、いずれのメンバーもこれからの生き方について考えることがあったようである。

それと同時に、多くのメンバーが福島で見たこと、聞いたこと、また感じたことなどを自分の中だけに留めるのではなく、より多くの人に語り継いでいきたいと考えていることも、このツアーの成果であると思う。学生の身分の私たちにできるなによりの復興支援。ボランティア活動の参加や福島への募金など様々なことが考えられる。どれも大切なことだが、福島で見たこと、聞いたこと、感じたことを「忘れないでいること」、それらを友達や家族、周囲の人間に「話すこと」こそがなによりの復興支援につながると考える。人間の記憶は、時の流れと共に風化し、やがては消えて忘れてしまう。しかし、会津の人々の生き様、震災による被害、５年経っても未だに残る爪痕、勇気ある行動、復興の希望などの事実は決して風化させていいものではない。私たちはこれらの事実を福島で目の当たりにしてきた。この事実を伝えることが出来るのは現地で事実を見、聞き、感じた私たちだ。

そのための第一歩として、今回の報告書作成と相成ったわけである。各担当の報告書では、今回ツアーに参加したメンバーがツアーを終えての思いや感じたことを綴っている。冒頭にも述べたように、これからの生き方や考え方に大きな影響を与えたツアーであったことは間違いないだろう。今回のツアーメンバーは、同じ大学に通いながらも目指す道、描く将来像は１人ひとりまったく違う。しかし、このツアーの中で共に感じ、考えたことは共通の思い出としてこれからも残り続けるだろう。それぞれ

がどのような形で福島のことを考えるのかは定かではない。しかし、同じ大学に集い、同じツアーに参加した仲間としてこの報告書の作成をもってそれぞれの支援のはじまりとしたい。

●2017（平成29）年

今年も拝見した大河原さんの人形劇

コミュタン福島

夕食後の振り返り

富岡町視察研修

浪江町視察研修

阿弥陀寺藤原住職によるご講演

※このツアーの一部が「福島県の教育旅行　ふくしま教育旅行　ニュース＆トピックス」に紹介されました。
「2017.10.24（火）13：36　淑徳大学総合福祉学部のゼミ生が避難解除された浪江町で研修を実施」
https://www.tif.ne.jp/kyoiku/info/disp.html?id=464

【学生のことば】

事前学習会から多くの人が協力してくださり、無事ツアーを終えて報告書を作っています。ツアーに携わってくださった方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

今回のツアーでは多くの方が私たちに福島のことについて話してくださいました。伝え方は人それぞれで、人形劇で伝えてくださる方や、語り部として実体験を話される方、現実問題を声を大にして伝えてくださる方もいらっしゃいました。また役場の職員、科学館の館長、住職とそれぞれの方の立場も様々でした。内容にも違いはありましたが、どの方の話からも震災や原子力発電所の事故を忘れてほしくないという気持ちと、福島の未来へ向けた願いが感じられました。当時から６年がたち、震災関連のニュースをテレビで見ることもなくなり、忘れていたことやもう終わったのかなと思っていたことも私の中にありました。しかしツアーを通して６年という時間の短さを感じ、福島の人にとってはまだ何も終わっていないという状況を見ることが出来ました。特に風評については一部の人の誤解や一方的な考え方がいまだに残っており、それが前へ進もうとしている福島県の方の道をふさいでしまっていると再認識しました。言葉が人を傷つけていました。

私は人を苦しめている言葉の力を反対のプラスにして、震災の復興に貢献できたらと思います。そのために今回のツアーで得た様々な情報や考えを自分のものにして伝えていきたいです。

ツアーでは現地の野菜などおいしいものをたくさん食べました。食事をするというのは日常においてはごくごく普通のことです。しかし避難所での生活では一日おにぎり一つだったという話を複数の方から伺いました。日々の生活で当然のように行っていることも、とても価値のあることだと感じました。亡くなった時に初めて気づくことも多く、今回の気づきをまた忘れてしまうかもしれません。できるだけ忘れないように、食事をしたり誰かとつながったりするなど一つ一つを大切にしながら生活をしていきたいと思います。それが阿弥陀寺で藤原住職がおっしゃっていた「他を生かす」ということにつながるのではないかと考えます。

最後に今回のツアーで多くの考えに触れ、それらを一つでも多く理解できるようになりたいという気持ちが芽生えました。福島原発の事故において現地の人は、立場は違えど自分たちの県や県民のためにできることをやっていたと感じました。しかし、国か東京電力が自分たちの利益を優先した結果、大きな被害が出てしまったと考えます。そして多くの不安や対立を生み出してしまいました。いろいろな気持ちを抱えながら、それでも前に進もうとしています。福島県にかかわらず、私は将来、いろいろな思いを持っている人に寄り添える人間になりたいです。すべての人の考えを受け入れ、それを支えられるような心と姿勢を身に着けていきたいです。すべてというのは現実的には無理かもしれませんが、それでも誰一人見落とさないでいたいです。またこの気持ちをできるだけ周囲の人に伝えていきたいです。

●2018（平成30）年

３年連続で大河原さんご夫婦のもとを訪れました。

弾き語り・人形劇の様子

※大河原伸さんの弾き語り「正義の味方はどこにいる」
右のQRコードから視聴することができます。

※大河原多津子さんの人形劇「太郎と花子のものがたり」
右のQRコードから視聴することができます。

山下地域交流センター（つばめの杜ひだまりホール）における本学OB岩佐さんによる研修

一般社団法人AFW吉川彰浩氏による視察研修

チャイルドハウスふくまる視察研修

【学生のことば】

全体を振り返って、三日間という短い時間でしたが、一日一日が色濃く私の中に残りました。一日目、大河原夫妻がどれほど大変な思いをして有機野菜を育てていたのか、その努力を原発事故によって一瞬で奪われてしまった悔しさをギターの弾き語りと人形劇を通して伝わってきました。そのあとに訪ねたコミュタン福島では、放射線がどういうものなのかを教わりました。放射線は身近なもので少しくらいなら身体に影響はないのだとわかりました。でも、実際に被害にあっている方の話を聞いた後で

は、頭では理解をしていても怖いという思いが残りました。

二日目、山下地域交流センターでの岩佐さんがお見せしてくださった津波の映像が忘れられません。本当にあっという間に水の量が増えていって、道に止まっていたトラックが軽々流されていきました。絶対にありえないことなんてないんだと思いました。津波が来るということの恐ろしさに身が震えました。

吉川彰浩さんのガイドによる視察では、立ち入り禁止区域や原子力発電所が近いため漁が再開できないと言われている海の方へ行きました。津波によって柱しか残っていない家や思い出が流されてしまった小学校をバスの中から見たとき、心が痛かったです。また、道路を挟んでの帰還区域の問題で800万円と引き換えに家を失うと突き付けられたらという話を聞いて、自分に置き換えて、状況を実際に見ないと他の人の痛みには気づけないと感じました。この時に、どこか客観的に見ていた私は頭を殴られたかのような衝撃で、何も言えませんでした。

三日目、チャイルドハウスふくまるの視察では、今まで大人からの目線でしか東日本大震災をとらえていなかったということに気がつきました。被害にあっているのは子供たちも同じで、今の自分がどれほど恵まれているのかを感じました。小さい身体で私が思ってもみない不安を抱えている子が沢山いるんだと知りました。

私はこのツアーを通して、津波の恐ろしさ、原子力発電の危険性、自分たちの故郷を想う気持ちなど多くの方の想いと考えに触れました。東日本大震災は、本当に大きな傷跡を残していったと思います。しかし、その中で、次に生かすため、自分たちの故郷を取り戻すため立ち上がる人たちの姿を見ました。人間ってこんなに強いんだということを改めて感じました。私も人との繋がりを大切にしたいし、福島は素晴らしいところで、震災に負けない心を持っていると伝えたいです。そこから、直接ではないかもしれませんが、何か支援ができればいいと思います。また、非日常はいつ起きてもおかしくないし、私にとって一番大切なものを考える良いきっかけになりました。本当に実りのある三日間でした。

【学生のことば】

ここまで、今回見学した施設や被災地を振り返ってきたが、私は福島県のことを全然理解できていなかったのだなということに気づきました。危険がないとは断言できないが、それでも故郷に残りたいという思いや、逆に故郷を離れて生活しないといけない状況や、熊本地震や西日本豪雨など他の災害が起こっているから東日本大震災の事を忘れている人も少なくないのではないかという不安など、福島の人々は今も悩み苦しんでいるのだなと実際に現地に行って視察することで気づいたことが沢山ありました。

私も、被災者の人々に寄り添いたいという気持ちはもちろんあります。ですが、故郷を奪われ、無残な街の姿を目の当たりにして生活している人の気持ちを十分に理解することは、あのような震災を経験していないから難しいとも思います。それでも、テレビ越しで被災地の様子を見ていた頃と違い、実際に目で見て、感じて、考えていくことでまだまだ私にできることはあるのではないかと思えました。何か行動に移すことが難しくても、テレビや新聞、ネットワークといったメディアを活用して今の福島県や他の被災地のことを知るだけでも意味があることだと考えています。

７年という長い年月が経っているように思いますが、公になっていないだけで、今も時間は止まったままという被災地の方々もいると思います。そのような人々の為にも、私は東日本大震災のことを忘れてはいけないなと感じています。当時中学生だった私も、家の棚やテレビが倒れるほどの地震に遭い、学校で実施していた避難訓練を実際に体験することになるとは思ってもいませんでした。東北の人たち程ではありませんが、このように恐ろしい経験をしているので、二度と災害が起きないでほしいと願いますし、万が一起きた場合に自分には何ができるか、今回の福島スタディーツアーを通して学んだことをきちんと生かしていきたいと改めて感じることができました。尊い命を守るためには、被災地の人々やそれ以外の国民が他人事だと思わずに全体が協力し合って復興に力を注ぐことが大切だと思います。

一人ひとりが被災地のためにできる限りの支援をすることで、被災地の方々が元の生活を取り戻すことに繋がるのではないかと考えます。

私は、スタディーツアーに参加する前は「今更何ができるのか」「ほとんど元通りになっているのでは」と後ろ向きに考えていました。けれど、今回視察した人の中には、「こうして福島に来てくれるだけでも有難い」という事を言ってくれた人がいて、「何かしよう」という概念にとらわれず、震災の事を「知る」だけでも東北の人々には嬉しいことなのかなと思いました。

震災から７年も経過すると、時間と共に記憶が薄れていくのは仕方ないことかもしれません。けれどそこで終わらせず、震災の記憶が薄れている人々、東日本大震災を経験していない人々に、このような恐ろしい出来事があったのだということを伝えていくことが私たちにできることだと思います。そうすることで、被災地の人々の心に少しは寄り添えるのではないでしょうか。

東日本大震災復興支援学習いわき合宿(鏡ゼミケーススタディ)

コミュニティ政策学部　コミュニティ政策学科　教授　鏡　諭

鏡ゼミケーススタディは、2013年から毎年東日本大震災で甚大な被害を受けた福島県いわき市を訪れ、NPO勿来まちづくりサポートセンターの活動を中心に、現地の震災復興とボランティア活動の状況を調査した。

2020年は11月14・15日、千葉キャンパス合宿等のガイドラインに従っていわき合宿を行った。

2013年

東日本大震災及び東京電力福島原子力発電所による事故で被災した地域の今日の状況と復興については、長期間現地を訪れることによって、現地の復興状況、特にまちづくりについての確認を行うことができた。さらに、震災で街が壊滅状態になった小浜・岩間地区でのNPO勿来まちづくりサポートネット（代表舘敬氏）の様々な復興支援活動は、学生にとっても貴重なお話で、大変勉強になったと同時に大きな感銘を受けた。

2014年

2015年

2016年

さらに、東北地方の震災復興の象徴として活動したスパリゾートハワイアンズでは、震災直後の約600名の宿泊客を東京圏に無事に届けるため、18台のバスの確保や帰路の道路状況の確認など、昼夜を問わず尽力した状況をマネージャの野木薫氏から伺った。

①いわき市小浜・岩間地区視察のねらい

いわき市勿来は、白川、根津と並ぶ日本三大奥州関の一つ。そのいわき市岩間地区では94世帯が被災。そのうち10世帯が同地域で住宅を建設。13世帯が高台移転（小原地区）約70世帯は地区外移転となり街が壊れた。震災から９年が経過し、復興公園も整備された一応落ち着いた感はある。しかし生活は厳しい、特に、原発による避難をしている人々の生活はいまだに安定していない。人々は不安の中で生活しており、その中でも少しずつ街が変わっていく姿を見た。

2017年

2018年

②勿来まちづくりサポートセンターの講話のねらい

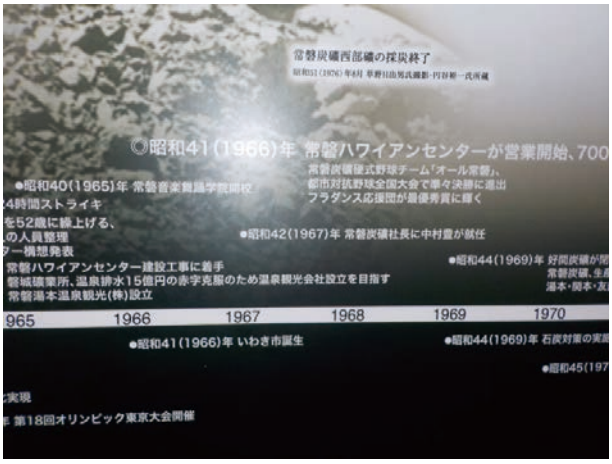
勿来まちづくりサポートセンターは、いわき市勿来地区で生まれ育った仲間の支援を目的に立ち上げられたNPOで、この活動が、勿来地区復興災害ボランティアセンターに発展させた。そこでは、行政よりも早く、各地からのボランティアの受け入れを行った。ボランティア希望者受入数は4300人。センターでまず取り組んだのは、区長等に協力を求めて地区の名簿作りを行った事。自治体は非常時にもかかわらず、名簿の開示を拒んだ。そこで、自分たちの力で作り上げ、全国からのボランティアを受け入れ、被災者とボランティアを繋ぐ、マッチングの重要性を語っていた。

勿来サポートセンターでは、復興モニュメントの構築、勿来の復興際など、勿来地区の復興活動を常にリードしてきた歴史があった。

毎年学生は、各自事前にテーマに沿った研究を行い、冊子を作成する。その中で疑問に思った点などを現地で調査し、さらに質問をし、活発な意見交換を行い、今日の復興及びまちづくりの課題を整理してきた。また、2020年はコロナ禍の中、宿泊はすべて個室とし、夕食の際にはソフトドリンクのみで短時間で終えた。

2019年

2020年



③ハワイアンズの被災と復興支援

翌日は、福島復興の象徴であるハワイアンズに伺った。常磐炭鉱閉山に伴う人員整理を少しでも食い止めるために、常磐ハワイアンセンターを作った。構想当時は、「福島でヤシが育つか」と揶揄にされたが、今日事業は軌道に乗った。街づくり新しい形であった。さらに、映画「フラガール」のヒットや東日本大震災時の全国行脚などで、スパリゾートハワイアンズとフラガールは、復興の象徴として全国にその名が知られた。

地震の２日後には、618人の宿泊客に対して、帰路の確保が不明のまま、大型バス18台を夜通しで調達し、11時間かけて東京へ到着し、多くの客から感謝の言葉をいただけたとの話には思わず胸が熱くなる思いを感じた。９年半の歳月は、地震による生活の格差を生み、確実に復興により歩みを進めている人がいる一方、いまだに一歩を踏み出せない人々がいて、被災地支援の難しさを感じた。

鏡ゼミケーススタディが福島県いわき市勿来地区を訪れて８年となった。確かに街は、変容し、道路や住宅は整備されてきた。しかし、以前の街とは異なり、賑わいは感じない。人々の息吹がかつてのように取り戻せたと感じるのは、いまだに点でしかない。

同時に、人々の関心は薄れ、震災や原発に影響された日々は段々と風化していくのかもしれない。しかし、東日本大震災があった事実、それによって人々の命が失われ、生活に大きな影響が出て、それが今も続いていることを決して忘れてはならないと感じる。

学生にとっては、舘さんや野木さんのお話を伺うたびに、多くの教訓を得ることができた。

最後に舘さんが「僕たちの勿来まちづくりサポートセンターの震災復興の活動は10年を区切りに終えようと考えている。これからは、本来のまちづくりの方に力を注いでいきたい。」とつぶやいたのが印象的であった。

しかし、いわき市にはいまだに双葉町の出張所が置かれ続けている……。

歴史資料保全ネットワークのボランティア活動に参加して

人文学部　歴史学科　教授　遠藤　ゆり子

歴史学科がある人文学部では、被災した史資料の救済活動ボランティアに参加しました。

【2016年度　宮城での活動】

2017年２月８・９日、人文学部歴史学科の学生４名は、東京キャンパス・ボランティアセンターの支援を受けて、宮城県でボランティアを行いました（引率者は筆者）。

８日は、仙台市にある東北大学災害国際科学研究所を訪れ、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城史料ネット）の活動に参加しました。天野真志氏のご指導のもと、被災地からレスキューされた襖から、下張に使われていた古文書を取り出す作業を行いました。何層にも張られた紙を霧吹きで濡らしては剥がし、記録を取って濡らして剥がす、という作業を繰り返します。指先がふやけてボロボロになりながら、みんなで古文書を取り出しました。このように被災地から救い出されてきた史料から、新たな歴史的な発見があるかもしれません。

翌日の９日は、宮城資料ネットの齋藤善之氏・佐藤大介氏のご案内で、石巻へスタディーツアーに行きました。まだ復興なかばの市街地を車でめぐり、多くの被害者を出した大川小学校も訪れました。津波にのみ込まれてしまった校舎の様子を見て、被害の甚大さと恐ろしさを感じました。海からこれほど離れた校舎が、津波に襲われるとはとても信じられませんでした。また、震災時に人々が津波から逃げた日和山という戦国時代の城跡にも登りました。この城の麓にあった集落の建物は悉く津波にのまれ、ただ唯一、本間さんというお宅の土蔵のみが壊れずに建っていたそうです。現在は、土蔵にあった資料は宮城史料ネットなどに救い出され、土蔵は震災の被害を伝える象徴として公開されています。

テレビの映像だけではわからない、震災による被害の大きさや復興の現状について学ぶことができました。また、被災しながらも救い出された史料を取り出す作業に携わることもできました。このような機会を与えてくださった宮城史料ネットの皆様、石巻の本間さんをはじめ関係者の皆様には、心より感謝申し上げます。

【2017年度　福島での活動】

2018年２月22・23日、人文学部歴史学科の学生13名が、東京キャンパスのボランティアセンター協力のもと、福島県でボランティア活動に参加しました（引率者は筆者）。

22日は、福島県郡山市において、福島大学の学生とともに「ふくしま歴史資料保存ネットワーク」の資料保全活動をお手伝いしました。この日は、福島県の浜通りにある双葉郡富岡町から運ばれた近現代資料のレスキュー作業を行いました。富岡町は、東日本大震災による地震・津波、そして原子力発電所の事故の影響により、住民たちが避難を余儀なくされた地域です。資料には、被災する前の富岡町の歴史、人々の暮らしを伝える古文書・写真のほか、古い卒業記念品などもありました。大事な資料を１つ１つきれいにしてから、三脚に設置した一眼レフカメラで資料番号とともに撮影します。その上で、資料の名前をあれこれと考えながら目録を作成しました。福島大学の学生たちとお話ししながら、楽しく、けれども真剣にボランティアに取り組みました。

翌日23日の午前中は、郡山市のNPO法人　富岡町３・11を語る会で語り人である渡辺さんの講話をうかがいました。震災時、避難時、そして現在のお話を、実際に体験した方からお話を聞くことで、新

たに知ったり、感じたりすることが多くありました。午後は、白河市へと電車で移動し、江戸時代に白河藩の城であった国指定史跡の白河城（小峰城）を見学しました。この城は、震災で石垣が崩れ、復旧のための工事が続けられています。石垣の修復の様子もパネルで展示されており、地域のシンボルである城の復興の様子を学ぶことができました。

学生たちは、震災から７年後の現状について知るとともに、歴史学を通して被災地の支援に多少なりとも関わることができました。このような機会を与えてくださった、福島歴史資料保存ネットワーク（代表　福島大学・阿部浩一氏）の皆様、富岡町役場の皆様、NPO法人　富岡町３・11を語る会の皆様、どうもありがとうございました。

復興支援ボランティアによる体験型学修および対人臨床への導入的アプローチの実施報告

短期大学部　こども学科　教授　前　正七生

〈プログラム名称〉

「復興支援ボランティアによる体験型学修および対人臨床への導入的アプローチ
（福島県いわき市：多世代広場事業における協働的学び）」

＊東京キャンパスボランティアセンター、淑徳大学短期大学部こども学科

＊父母の会協賛による共生体験。

〈場　　所〉

福島県いわき市：NPO法人いわき緊急サポート主催「すくのび広場」

〈実施概要〉

起案者は震災の翌年（2012年４月）より四年間福島県内の指定保育士養成施設に勤務し、震災後の被災地での保育士養成に、地域貢献に携わってきた。文部省科学研究調査費（基盤研究Ｃ）も三年間取得し、本学淑徳大学短期大学部に異動後も「福島県いわき市における幼児の発達支援と保護者支援に関する臨床的研究」（文部省科学研究調査費：基盤研究Ｃ 平成28年度～30年）として継続研究を行ってきている。また、その過程で地域の子育て、親支援に従事する保育所・幼稚園、NPOの方々と継続的な関係を持ち、復興への共同作業者として参与してきた。今般のコロナ禍により2020年度は実施できなかったが今年一回目の緊急事態宣言が発出される直前の2020年２月半ば（平成28年～令和元年度）まで夏、冬の年２回以上計９回、継続的に実施してきた。

本プログラムは、被災地で復興に献身的に従事するNPO「いわき緊急サポートセンター」（前澤由美代表）と連携し、市内の百貨店の一角にて行われている子育て支援：「すくのび広場」にて子育て・保護者支援のボランティアとして参加することを中心に実施してきた。震災後５年余～10余年が経つ福島県内の実情を実際の体験によって知り、復興に寄与するNPOの方々、親子と実際にかかわる中で学生のコミュニケーションの質的向上の場、対人臨床・支援職への導入的な経験の機会とするものであった。

参加学生は特に短期大学部初年次をメインとするものであり、短大入学後、学年後半から保育実習、教育実習に臨む前の段階で、対人臨床の基礎および多様なコミュニケーションを直接の対話と体験によって身に付けること、震災直後の避難所から始まった「多世代広場」「子育て支援」広場の実情と震災からの復興の現状についても理解し、福祉と教育、障害や子育て支援に関しても視野を広げる総合的な学びの提供の場として企画された。また、コミュニケーションや対人関係に課題のある学生、対人関係で難しさを抱える学生にも積極的に声をかけ、特に短期大学部では少数派の男子学生にとって主体的でアクティブな学びの場となることも見込んだ。

〈実施の目的と内容〉

・学生には被災地の現状と支援の実際に触れることを通して、以下の事項に関して経験的に学び、過去の支援の経緯を理解するとともに今後の継続的な支援の必要性を実感することを目的とした。

・いわき緊急サポートセンター:前澤代表から福島県の子育て支援・サポートの経緯と実際についてレ

クチャーを受け、福島県いわき市の子ども・保護者とかかわり、子育て支援の実情について理解する。
・いわき市内の保育の現実に「実際にかかわる」ことで、体験的な学びとする。
・福島県いわき市にて東日本大震災直後から避難所として始まり、今も継続的に行われている避難者および市内の保護者とこどもの支援、障碍者・祖父母の居場所としての総合的広場事業のサポートなど復興支援ボランティアを経験。１泊２日で乳幼児、その祖父母・保護者、障碍児者と交流。
・特に子育て中の親御（父母両方）さんと話し、関わり、遊び、環境整備などを経験した。市内在住の看護士、保育士、地元の学生（フラガール）、手話落語家：噺亭スコッチ氏とも交流。
・震災以降24時間体制で地域の緊急の子育て（病児・病後児保育と預かりなども）支援を行っているNOP法人いわき緊急サポートの前澤代表、スタッフからも講話、様々な事例などについても訊き、震災後の復興の中で生じてきている課題やコミュニティ、福祉・教育の問題についても体験的理解を深めた。

〈参加実績〉

平成28年９月１～２日	参加学生７名	平成29年２月24～25日	参加学生３名
平成29年８月30～31日	参加学生13名	平成30年２月25～26日	参加学生３名
平成30年９月２～３日	参加学生12名	平成30年12月１～２日	参加学生７名
平成31年２月24～25日	参加学生７名	令和元年９月１～２日	参加学生13名
令和２年２月14～15日	参加学生８名		

※詳細については平成28年度～令和元年度「ボランティアニュース」にて体験記、報告を毎年おこなっている。
※淑徳大学短期大学部父母の会から、学生の旅費・宿泊費等の手厚い補助を得て毎年実施されている。
※以下は初年度第１回、三年目第５回参加学生の感想である。

（第１回　参加学生のコメント）

いわき市駅前の量販店の四階の一角で震災直後から始められ、今も多くの様々な年齢の子どもとその親御さんが集まる「すくのび広場」に２日間ボランティアに行きました。９月の平日にもかかわらず、多くの子どもが来ることに驚きました。しかし、そのお陰で多くの乳幼児と実際にかかわり、学ぶことができました。子どもたちと遊ぶほかにも、手遊びや絵本の読み聞かせ、製作などの準備、朝の掃除や終了時の片付けなど様々な体験をしました。

実習とは異なり保護者の方と話す機会も多く、貴重な話を聞くことができました。どの保護者も「子育ては大変だけど充実している」、「このような子どもを安心して遊ばせられる広場があることがありがたい」とも言われていました。それらの言葉を聞き、自分自身、保育所や幼稚園でも保護者の声を聞き、保護者のニーズに少しでも応えることが子どものことを考える上で大切なことだと気づくことができました。

こども学科　（波多野　沙樹）

私は、福島県いわき市のNPO法人「いわき緊急サポートセンター」が行っている「すくのび広場」でのボランティアに参加して来ました。東日本大震災から約五年が経ち、いわき駅周辺の再整備された街並みなどの様子からは五年前に大きな災害があったとは思えませんでした。しかし、復興は進んでいても被災した方々の記憶には当時の悲しみが残っていると感じました。今回のボランティアでは、子どもたちと一緒にボール遊びをしたり季節のカードを製作したりしました。初めは、私も子どもたちも緊

張していてなかなか話してくれませんでしたが、慣れてくると子どもたちからいろいろ問いかけてくれるようになり嬉しかったです。一歳の子どもを持つ保護者の方から「遠くから来てくれてありがとう」と励ましの言葉をかけて下さり、このボランティアに参加してよかったと思いました。これからも様々なボランティアに積極的に参加していきたいと思います。

こども学科　（番家　海希）

（第５回　参加学生のコメント）

私は今回、福島での復興ボランティアに参加して実習では経験出来ないことを学べたような気がします。「すくのび広場」では子どもと関わるのはもちろん、保護者からお話を聞くことができ、地域の方々ともお話が出来る環境が整っていました。今回は実習前に参加したこともあり、子どもと上手く接せるかなど不安がいっぱいだったのですが、「広場」の子どもたちはとても元気で、一緒に遊んでいた子とお別れする際には泣かれてしまうほど仲よく遊べました。改めて「子どもと関わる職業に就きたい」と思うことができ、いい体験ができたと思っています。すくのび広場に来ている親子の中には外国から来た親子もいて、日本との子育て環境の違いなどのお話を聞くことが出来ました。ボランティアを通じて改めて感じたこと、話を聞いて納得したこと、手遊びや絵本の読み聞かせを実際に行ったこと等、この度の経験で得たことを実習や将来に向けて活かしていきたいと思います。

こども学科　（平田　毬花）

今回、いわき市の「すくのび広場」でのボランティアに参加し、たくさんの保護者や子どもたちとかかわることができました。ボランティアに行く前は、子どもや保護者ばかりだろうと思っていましたが、年輩の方も来られていて、この「広場」は震災後、思い切り遊べない子どもや保護者だけではなく、高齢者にも集いの場となっていることを実感しました。また、今回のボランティアで私は手遊びやフラダンス、絵本の読み聞かせ等もおこないました。子どもたちが楽しく真剣に取り組んでいたため一緒におこなう私の方も楽しくできました。

今回のボランティアを通じて、今後の世の中には子どもや保護者、高齢者が安心して身を置ける環境の大切さを感じました。これから保育者等、人と関わる仕事に就く私たちがこういった環境を増やしていくことが大切だと感じました。そしてそのために勉学を積んでいき理解を深めていくことが大事だと思っています。

こども学科　（北山　孝一）

尚、本プログラムは　科研費「福島県いわき市における震災後の保育の現状と課題」（研究課題/領域番号25381109　基盤研究（C）　2013～2015年　研究代表者：前正七生）からの継続研究である「福島県いわき市における幼児の発達支援と保護者支援に関する臨床的研究」（研究課題/領域番16K12389 基盤研究（C）　2016～2019年　https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-16K12389/）において、震災後十余年までの被災地の保育、幼児教育と保育者養成の実情、コミュニティーにおける新規かつ継続的な課題を可視化した研究と連動するものでもある。

一連の研究とプログラムは震災からの復興を被災地の「内と外」の両視点、共に歩む協働として考え、「現在進行形の」支援としての連携を構築することを目的とするものである。同時に、「被災地外部」の人間にとっても、身体を通した自らの言葉として語り続けることが、来たる「少子高齢」「多文化共生」「多様性」を受容する社会のヒント、モデルとなり得ると考えている。※現在も震災後10年に連なる継続研究として科研費（基盤研究C）を申請中である。

〈関連する研究成果等〉

［雑誌論文］

・「震災後のいわき市における子どもの発達支援・親支援の実際と多世代交流広場の展開 ―震災後10年に連なる臨床的な「語り」へのアプローチ」2019
著者名／発表者名　前正七生　雑誌名　淑徳大学短期大学部紀要　巻：59号　ページ：102－111

・「震災後の保護者支援、発達支援の現状と課題　―“場”と“育ち”の語りを中心に」2018
著者名／発表者名　前正七生　雑誌名　淑徳大学短期大学部紀要　巻：第58号　ページ：117－127

・「「主体性」と思考を育む震災後の保育士養成への試み　―養成課程における科目編成とルーブリックの可能性―」2017
著者名／発表者名橋浦孝明（いわき短期大学）、前正七生（淑徳大学短期大学部）　雑誌名　『いわき短期大学紀要』第50号　巻：第50号　ページ：25－44　査読あり／謝辞記載あり

・「幼小連携を意識する「新たな」教育課程の現状と課題 ―養成教育からみたコンピテンシーベースの新学力・子ども観による評価可能性―」2017
著者名／発表者名　前正七生　雑誌名　『淑徳大学短期大学部紀要』　巻：第56号　ページ：15－40

淑徳大学から思いをつなぐ。つなげる。
（卒業生・教員からのメッセージ）

特設サイトURL：https://www.shukutokuuniversity-tomoiki311.jp/connect/

思いをつなぐ。伝えたい思い。
当時災害支援活動に参加した卒業生、教職員から、当時の思い、10年がたち改めて伝えたいことなど、メッセージが寄せられました。

卒業生からメッセージ

2019年卒業　教育福祉学科　三浦　知也

１）当時を振り返って
私は東日本大震災当時、中学生でした。自分にできることは何かを考え、募金活動による災害支援をしていました。大学生になり、入学式で地域支援ボランティアセンターの存在を知ってから、すぐに当時１号館にあったボランティアセンターに駆け込みました。そして、入学して１ヵ月も経たないうちに、私は石巻市雄勝町へ行き、鯉のぼりをあげることになったのです。そこから、大学卒業までの間は、白旗七夕祭りでの被災地支援物産展、大川小のひまわりプロジェクト、スタディーツアーでの現地小中学生との交流、仮設住宅の訪問、現地の特別養護老人ホームでの交流、雄勝町での大須風穴山山道整備ボランティア、古民家再生事業への協力、雄勝PR動画プロジェクト、ともいきカレンダーの作成、ふくしまっ子Smileプロジェクトへの参加といった様々な活動に力を入れ、本当に目まぐるしい日々でした。震災から時間が経った今こそ必要な支援というものを考え、活動を続けました。在学中、毎年雄勝町に足を運ぶことで、メディアを通しては伝わり切らない「震災からの復興の様子と、そのあり方」を考える良い機会となりました。ボランティアセンターの代表、学生消防隊の隊長などを経て、ボランティアへの協力を呼びかけたり、防災意識の啓発をしたりすることで、自分自身の視野を広げることにも繋がりました。

２）当時の思い
当時のことで、思い出に残っていることがあります。それは、私が入学してから、初めて雄勝町に足を運んだ時のことです。私は、震災から４年が経っても、依然復興が進まず、倒れたままのガードレールを見て、「自分がここで、鯉のぼりをあげて、意味があるのだろうか。雄勝のために、何か出来ているのだろうか。」と不安になっていました。しかし、鯉のぼりをあげて、現地の方々と話すと「鯉のぼりを見ると元気がでる。」「この地を忘れず、いつも来てくれていることが、何より嬉しい。」との声が。そして、その後ろには2015年版のともいきカレンダー。５月の写真は、「旧雄勝総合支所にかけられた鯉のぼり」。この時、私は「息の長い支援」の大切さを実感したのです。「たとえ一人一人に出来ることがわずかであっても、淑徳大学の先輩たちが『Together with him』の精神で、雄勝町と共に歩み続け、支援をしてきた。その後輩である私たちが、その思いを受け継ぎ、また共に歩むことに意味がある。」

このように考え、私は淑徳大学の一員として、また一人の人間として雄勝町の支援を続ける決心をしました。そして、この支援の輪を、さらに広げていこうと思いました。

余談になりますが、翌年の春、同じように雄勝を訪ねた際に、写真のみが切り取られ飾られているともいきカレンダーを見て、感動をしたことは今でも鮮明に覚えています。

3）今について

活動の中には、志半ばで断念することになってしまったプロジェクトもあり、無念の思いが今でもあります。しかし、今の後輩たちが私たちの残した思いを継ぎ、中断していたプロジェクトを完遂したという話も聞きました。嬉しい限りです。活動を通して、出会った先輩、同輩、後輩たちは、かけがえのない本当に大切な存在です。私自身も大学で培ったボランティア精神を忘れず、昨年の台風15号被害の際には、個人で災害ボランティアに出向き、２日間活動をしました。雄勝町についても、今でも自分にできる方法での支援を続けています。各地で復興が進んでいますが、何をもって復興と呼ぶのかは、引き続き考えていく必要があると思います。また、現在の仕事でも、災害支援の経験を役立てています。これからも、東日本大震災を経験していない子ども達に、私自身が経験し、学んだことを伝えていきます。今の私があるのは、大学での経験があったからです。

4）10年が経ち、伝えたいこと

2011年３月11日から、10年が経ちますが、震災の教訓を忘れてはいけません。先人が残してきた震災の教訓が、人々の命を救ったという話は珍しくありません。災害の恐ろしさをよく知り、それを広めることが、身近にいる人だけでなく、多くの人を守ることへと繋がります。日々、災害への備えを忘れないでください。あなたのその意識が、周りの人の意識を高めることに繋がります。

淑徳大学の学生と教職員が一丸となって繋げてきた、「息の長い支援」をこれからも大切にしてください。共に歩み続けることで、小さな一歩が、大きな一歩になります。時が経てば、支援のかたちも変わっていきます。どのような支援が今、求められているのかを考えて、よりよい支援につなげていってください。

そして、新たな災害が起きた時に、我々がまた共に、誰かの力になれればと思います。私も、卒業生の１人として、「ともいきの精神」を大切に歩んでいきます。

5）学生に伝えたいこと

私がボランティアセンターの代表をしていた頃に、伝えていたことがあります。それを以下に記します。

「ボランティア」と、ネットで検索をすると、
→「自分から進んで社会活動などに無償で参加する人」と出てきます。
では、英語の「volunteer」の意味はどうでしょうか。
→【名詞】「志願者・奉仕者」【動詞】「自発的に申し出る」という意味です。
つまり、「ボランティアは自分の意志で行うもの」です。

自分の意志で行うものだからといって、すべて自分でやる必要は、ありません。誰かが企画している、活動していることが自分のやりたいこと、望んでいることであれば、それに協力し共に活動することだって、ボランティアです。

もちろん、自分のやりたいことが明確にあって、企画・実行を出来る人もいます。

ただ、忘れないでください。待っていても来ません。来るのはボランティア募集のメールばかりです。

メールが来ても、やろうという意思表示をしなければ、参加することは出来ません。メールにやりたいことがなければ、自分でやりたいものを探すか、生み出すしかありません。これを忘れないでください。

さて、ボランティアにおいて、しばしば言われることは「まず自分の出来ることから始めなさい」ということです。これはどういう事かというと、出来ること、つまり今持っている得意なこと、好きなことは「自主性」に繋がりやすいからです。そして、あなたに出来ないことは他の人が支えてくれるだろうから、あなたはあなたのできることでやってみてください。ということです。だから、勇気をもって、一歩進んでみてください。

以上、一部省略していますが、私が伝えていたことです。以前に比べて、ボランティアへのハードルは下がっていると思います。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響でボランティア活動も自粛している世の中です。今は、自分に出来ることからボランティアをしてみてください。買い物をした時に、募金箱にお釣りを入れる。それだって、あなたの意思と思いやりがあれば、ボランティアと言えると思います。

そして、感染症が落ち着き、またたくさんのボランティアが出来る世の中になったら、自分の意思で、勇気をもって、一歩進んでみてください。ボランティアで得た経験は、きっとあなたにとって宝物になるはずですから。応援しています。

6）大学に期待すること

今後とも「息の長い支援」を大切にしていただきたいです。そして、学生がボランティアへ安心して出向くことが出来るように、引き続き手厚いサポートをお願いします。私が淑徳大学で感じた良さは、教職員と学生の距離が近いことです。「Together with him」の精神をもち、教職員と学生が一丸となって、共に歩むことで淑徳大学の良さが発揮されると思います。学生が生き生きと活動する大学として、これからもよろしくお願いします。

7）その他のコメント

在学中は大変お世話になりました。このような機会をいただき、ありがとうございます。卒業生は、いつでも大学の力になります。おそらく、この企画にも多くの卒業生が協力をしてくださっていることと思います。その一人として、私もコメント出来たことを大変嬉しく思います。字数が大幅に超えてしまった部分がある点、お詫びいたします。淑徳大学への思いの強さの表れと思って頂ければ幸いです。今後とも、よろしくお願いいたします。末筆ながら、淑徳大学のますますのご発展をお祈り申し上げます。

2012年卒業　社会福祉学科　坂井田　圭二

2011年３月11日、震災発生時刻。当時私は本大学千葉キャンパスの15号館最上階におりました。突然の地震と共に、周辺の置物や棚が次々に倒れていく光景。逃げようとも考えられず、壁にしがみつく事しかできなかったあの記憶は今でも忘れられません。

皆さんの中にも似たような、あるいはそれ以上の経験をされた方もいらっしゃると思います。その時に「当たり前の日常が一変した」ことを少なからずイメージされたのではないでしょうか。そしてそのことを皆さんはどのように捉えたでしょうか。

10年前の私自身は、震災のその物理的影響からやはり悲観的なイメージを持っていました。被災地を

訪問した際、「これが地元だったら……」と思うとその後は考えたくもありませんでした。しかし10年経った今思うのは、「震災は確かに日常を一変させる程に甚大な爪痕を残した。でもだからこそ、その日常がいかに大切であるかを学ばせたのではないだろうか」ということです。これは現在の新型コロナウイルスの影響にも通じる所があると考え、より一層「当たり前の１日を大切に生きよう」と思うようになりました。

自然災害を記憶に留めて語り継ぐ。自然災害を学びや気付きと捉えて次の行動に移す。どちらも正しい選択ですし、他にも何か選択肢があるかもしれません。皆さんにとって最善の選択は何か、この機会に是非考えてみてほしいと思います。

2008年卒業　社会福祉学科　安藤　悠

東日本大震災から早10年、復興された街並みを見る度、そこに生きる人の強さを感じます。学生の頃、災害救援ボランティアとして友人達と活動もしましたが、被災地の方に逆に勇気を貰うことも多々ありました。亡くなった方の遺影に復興を強く誓う現地の方の姿を見て、自身を改めて見つめ直す機会を頂くこともありました。ボランティアは決して相手を助けるためだけの活動ではありません。その人たちと共に過ごし、体験や感情を分かち合うことで、自分自身に新たな気づきを与えてくれるものです。東日本大震災の被災地支援に尽力された淑徳大学の皆様にとって、その経験がかけがえのない一生の宝になることを心より願います。

2017年卒業　社会福祉学科　髙木　直揮

初めて雄勝を訪れた時点で震災から２年経過していたものの、当時の雄勝の姿に同じ日本で起こった現実であることを衝撃と絶句という言葉でしか表現できませんでした。

豊かな海に囲まれ、自然豊かなこの町に何かなす術はないか、少しでも雄勝を盛り上げ、雄勝という町が持つ本来の魅力を伝えるにはどうしたらいいか、とにかく何か出来ることはないのかと必死に模索していました。

昨年からのコロナ禍の影響で雄勝へはしばらく行けていませんが、高台移転も進み町の姿だけを見れば復興は進んでいると言えるかもしれません。しかし、その中にも我々には見えないところで住民の方の苦労や、復興に向けた現状に様々な思いを抱いている人も多く、復興という言葉の重みと本当の復興とは何かを改めて考えなくてはならないと感じています。

もう10年経ったと考えるか、まだ10年なのかと考えるか、感じ方は人それぞれと思います。しかし、この震災は誰にとっても決して他人事ではありません。自然災害の多い日本だからこそ、自分や大切な人を守るためにも、過去の震災から学び、大切な人や自分を守る術を身に付けることも復興支援につながる意識改革だと思います。過去から学び未来へ繋げるための一歩をぜひ皆さんにも踏み出してもらえたら嬉しいです。まずは、ぜひ雄勝へ行ってみてほしいです。雄勝の海産物は本当に絶品です。現地の名産や魅力に触れながら現地を知ることも１つの復興支援だと思います。４年間という時間の中で、皆さんに少しでも雄勝という町の魅力を知ってもらえたら嬉しいです。

今はコロナ禍で難しいと思いますが、雄勝の魅力をまずは感じ、そしてその魅力を発信できる機会や人が増えてほしいと願っています。

震災という１つの出来事からしても、そこから出てくる課題や視点はとても多いです。１つの視点に

とらわれず、多くの事を感じ学び、そしてその思いを社会に出たときに活かしてほしいです。

2014年卒業　コミュニティ政策学科　津田　康平

当時、15号館の高層階にて大学パンフレットの取材中に揺れが起こりました。何も分からないまま非常階段で避難した恐怖は今でも覚えています。

被災された方々の為に活動したいと考え、大学からの現地派遣でのボランティアに参加させていただきました。この経験が後の学生生活や卒業後に大きく影響しました。

現在、議員秘書をしており、令和元年の台風15号の際、被災された方々の事を思い、迅速に被害状況把握や自治体との連携、報道情報の修正等を行いました。特に多古町は停電により断水。電話も繋がらず、現地へ赴き、自衛隊による支援の必要性を上申、給水支援等の要請に関わりました。

災害や事故、疫病等、いつ何が起きても対応できるよう知識や経験などの準備が必要です。何よりも、辛い思いをされた方のお気持ちに寄り添えるよう行動することが大切だと東日本大震災での経験を通して学びました。

2012年卒業　実践心理学科　倉持　裕子

2011年５月１日、１か月10班交代体制のボランティア団の１班として初めて石巻市に足を踏み入れ、避難所の大須小学校へ向かう途中、真二つになった北上大橋と、そのすぐ横の大川小学校を見て、「息が詰まる」という言葉を初めて体験しました。足元に広がる生活の跡と目前に広がる海と空の美しさのアンバランスさ。体に纏わりつくような独特な空気の重さと、津波を被った町の匂いを今でも鮮明に思い出し、心の中で手を合わせる毎日です。当時私は様々な発表の場で、「瓦礫は瓦礫ではなく誰かの財産。私は二度と瓦礫という言葉を使わない」と訴え続けてきました。それは、「自分の家や学校や職場を、『瓦礫』と呼ばれる事はどれだけ悔しく悲しいことだろう」と考え、そして目の前で肉親や友人が津波に飲まれても、「雄勝が好きだ」と言う人々が居ると知ったからです。何ができたか？私たちは「何もできなかった」。どれだけ何をしても満足できないその思いが、当時の我武者羅だった私たちの背中を押したのです。

10年が経ち伝えたいこととして、2011年５月１日に初めて石巻市に入り私が衝撃を受けたのは、東京から新幹線で僅か２時間かからない場所であのような大災害があったにも関わらず、首都圏はすでに平常の生活を取り戻していたことでした。今、更に10年という月日が流れ、東日本大震災は人々の中で過去の出来事になりつつあります。その中で人々に“語り継ぐ”ということも大変難しくなってきたと感じます。しかし忘れてはならないことは、自然災害は決して「他人事」ではないということです。実際にこの10年間、あらゆる場所で様々な自然災害が発生しました。いつ自分が被災者になるか分からないという危機感は持っていて間違いないことだと言えます。

風化していくことと忘れていくことは違います。あの大震災を経験し、語り継げる人間がいる限り、東日本大震災を“歴史”と言い換えるにはまだ早いのです。震災は、まだ終結してはいません。

2016年卒業　実践心理学科　伊藤　雅貴

最初は思うことが色々ありすぎて分からなかったです。
１歩を踏みだせることをするにはどうしたらいいのかな……と感じていました。
10年が経ち、人生の中で各々に役立てているのかなと思えるようになっていてほしいです。
学生に伝えたいことは、「ボランティアの経験は必ずいい事があります。だからこそ、１度は行ってみるといいように思えます。」ということです。淑徳大学に新しい風・発展を期待しています。

教員からのメッセージ

観光経営学科　教授　朝倉　はるみ

2011年３月11日は、私はまだ前職に携わっていました。帰宅後にテレビを見て、「まるで映画のＣＧを見ているようだ」と、茫然としたことを覚えています。
2012年度から淑徳大学で教えており、2017年２月に、大学の地域支援ボランティアセンターの東日本大震災復興支援プログラム「第４回 スタディーツアー」に参加させていただきました。被災地を訪れ、被災された方のお話を伺うことで、改めてあの災害の恐ろしさを確認しました。
大学では、毎年、新入生が東日本大震災を体験した年齢が低くなり、いずれはあの大震災を知らない学生が入学してくる、という現実に向き合わざるを得ません。では、教員として何ができるのか？　私は、多様な科目であの大震災を学生に伝えること、これに尽きると思います。
例えば、「観光地理国内」という科目では、私自身が撮影した被災地の写真を投影したり、ゼミの視察で被災地（仙台市）に行った際は、震災関係施設を来訪するなどしてきました。
学生が、「ああした災害がもう一度起こるかも、自分も被災者になるかも」と、あの大震災を心にとめてくれるよう、伝え続けていきたいと思います。

歴史学科　教授　遠藤　ゆり子

2017年２月８・９日、人文学部歴史学科の学生４名とともに、東京キャンパス・ボランティアセンターの支援のもと、宮城県で被災地支援ボランティアを行いました。
８日は、仙台市にある東北大学災害国際科学研究所を訪れ、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城史料ネット）の活動に参加しました。当日は、被災地からレスキューされてきた襖から、下張に使われていた古文書を取り出す作業を行いました。何層にも張られた紙を霧吹きで濡らしては剥がし、記録を取って濡らして剥がす、という作業を繰り返します。指先がふやけてボロボロになりながら、みんなで古文書を取り出しました。このように被災地から救い出されてきた史料から、新たな歴史的な発見があるかもしれません。
翌日の９日は、宮城資料ネットの齋藤善之氏・佐藤大介氏のご案内で、石巻へスタディツアーに行きました。まだ復興なかばの市街地を車でめぐり、多くの犠牲者を出した大川小学校も訪れました。津波にのみ込まれてしまった校舎の様子を見て、被害の甚大さと恐ろしさを感じました。海からこれほど離れた校舎が、津波に襲われるとはとても信じられませんでした。また、震災時に人々が津波から逃げた

日和山という戦国時代の城跡にも登りました。この城の麓にあった集落の建物は悉く津波にのまれ、ただ唯一、本間さんというお宅の土蔵のみが壊れずに建っていたそうです。現在は、土蔵にあった資料は宮城史料ネットなどに救い出され、土蔵は震災の被害を伝える象徴として公開されています。

テレビの映像だけではわからない、震災による被害の大きさや復興の現状について学ぶことができました。また、被災しながらも救い出された史料を取り出す作業に携わることもできました。このような機会を与えてくださった宮城史料ネットの皆様、石巻の本間さんをはじめ関係者の皆様には、心より感謝申し上げます。

教育福祉学科　准教授　小林　秀樹

東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故から10年となります。震災当初からの何かできないかという思いが募り、平成28年から平成30年まで正課外講座として福島県を中心に被災地を訪問するスタディーツアーを企画運営させていただきました。今あらためて振り返りますと、学生たちは被災地でお伺いしたお話から、身近な命の尊さ、日々の生活を守る大切さ、またこれからの私たちにできることについて真剣に考えてくれたと感じます。そして、温かく迎えてくださった方々の笑顔に励まされ、その土地と人々への親しみと敬意とを抱かせていただくことができました。参加した学生たちは、この節目にきっと心を寄り添わせてくれていることでしょう。

10年の節目を迎えましたが、かけがえのない命と甚大な被害を引き換えに残されたはずの教訓を、私たちは今と未来に生かしていかなければなりません。災害も原発の問題も他人事ではない時代を私たちは生きています。これからも機会をとらえては学生に語り、教訓を新たにしていきたいと思います。

また訪問させてください。お会いできることを楽しみにしております。

コミュニティ政策学部　准教授　本多　敏明

2011年５月の延べ20日間ほど、私は宮城県石巻市雄勝町大須小学校避難所で本学の避難所ボランティアの一員として過ごしました。その間、千葉と雄勝を３往復ほどしましたが、千葉に戻っている合間も、身も心もずっと雄勝にありました。当時の避難所の様子は別に書いたので、10年経ってコロナ禍の現在だからこそ、当時ほんの５分ほど、大須地区の仮埋葬地に足を踏み入れさせてもらったときのことを書き留めたいと思います。コロナ禍で、あたかも生（存）だけを最上の価値と捉え死者の弔いを後回しにする社会に対して疑問を呈したイタリアの哲学者Ｇ.アガンベンの警句と同様に、弔うことの大切さとは何なのでしょうか（なお、石巻市では火葬場の停電・燃料不足また遺体の多さゆえ、被災直後は仮埋葬地への土葬を、そして５月初めごろから改葬（土葬から火葬へ）を行ったようです。その事業に携わった葬儀社の記録は次を参照。株式会社清月記、2012年『清月記活動の記録』https://kioku.library.pref.miyagi.jp/miyagi/index.php/ja-menu-item-search.html?action= detail&uniqid=52050100000900442）。

「そこ」は本当に何もないサッカー場一面ほどの広場でした。中央あたりにでこぼこと人間一人が入るにはまだまだ余裕がある大きさの、思い返せばちょうど一つの棺が収まるほどの、重機で四角くえぐられた「穴ぼこ」が50個ほど整然と並んでいました。そのひとつ一つの「穴ぼこ」が仮設の埋葬場所（墓穴）でした。

「穴ぼこ」の半分ほどにはすでに掘り返された濃い茶色の土がかぶせられており、その下で眠るご遺

体の存在の重みを静かに報せていました。それは、周囲の白く乾いた土からくっきりと隔てられ、このときほど茶と白という２つの土色のコントラストがこの世とあの世の「境界線」のように感じられたことはありませんでした。

かぶせられた土のうえには「番号札」以外に墓碑や花束等は一切なく、「埋められども弔われず」、還るべき場所に辿り着くときを待つ存在の数々がありました。そこに居合わせた私も身の置き所がなく、せめて死者の声を少しでもキャッチできたらと、耳を、身体全体を澄ませようとしたものの、残念ながら何も聞こえてはきませんでした。しかし、そのとき人類が連綿と死者を弔ってきたことの大切さを直観した思いがしました。

弔うことは、死者のためにだけ行うことでなく、むしろ生き（残っ）た人びと同士がこれからも「ともに生きていく」ためにこそ不可欠な営みだと思います。弔うことを後回しにしたり蔑ろにしてしまうならば、われわれは、死者の声だけでなく、生きている同胞の、特に傷ついた人の呻きに気づくための「センサー」も鈍らせ、傷ついた人を改めてわれわれのコミュニティに迎え入れケアする利他共生の作法を見失うことにもつながりかねないと感じます。弔いは、死者を「かえらぬ人」として「われわれ」から切り離して見送ることであると同時に、生き残った「われわれ」がきちんと「われわれ（共同体）」であろうとしているかが問われることでもあると感じます。

教育福祉学科　教授　槇　英子

保育所での震災ボランティア活動から10年が経過しました。

学生５名と同僚１名がすでに現地に入っていたので、新幹線の駅でレンタカーを借り、一人で運転して石巻市立吉浜保育所に向かいました。カーナビで示された道が次第になくなり、草原と化した海辺を、轍を手がかりに走ったあの時の光景は、今でも忘れることができません。

ようやく到着した時、迎えてくださった先生方の笑顔に、うれしさと戸惑いの両方を感じたことを覚えています。

吉浜保育所の建物は津波を免れていましたが、「あの時子どもを帰さなければ」という話を聞き、胸が締め付けられる思いでした。

ボランティア活動は、清掃や草取りが中心でしたが、冷たい飲み物等を笑顔で提供してくださり、こちらが励まされているようだと学生たちと話していました。そんな中、持参したパラシュートの遊びを共有した時の子ども達の笑顔が印象的でした。

私は大学に戻って、県内でも被害が大きく、制限の多い生活をしていると聞いた浦安で、子ども達とアートを楽しむ「笑顔プロジェクト」をゼミ活動として行いました。原動力は、石巻の保育士の方々と子ども達の笑顔だったと今改めて感じています。

あの時の笑顔とその意味を、これからも忘れないようにしたいと思っています。

社会福祉学科　教授　松山　恵美子

2011年５月中旬に宮城県石巻市雄勝町大須小学校避難所での本学避難所ボランティアのひとりとして参加しました。大須小学校に向かうに連れて道路が無くなり、景色が変わり、災害の大きさを改めて受け止め「何ができるのか」と考えたことを覚えています。二度目は2012年８月６日～10日の５日間、大須小学校と大須中学校の生徒さん達の学習のサポートをする学習支援ボランティアの引率で参加しまし

た。校長先生に「子供たちに大学の素晴らしさを伝え、新しい未来に繋げてほしい」と言われたことを思い出します。三度目は2017年２月に、大学の東日本大震災復興支援プログラムへの参加です。安全を求め高台に住宅地を移す、堤防を高くするなどの復興への道は見慣れた街並みをも変えてしまうという悲しい事実でもあり、東日本大震災を忘れてはいけないと改めて思います。

10年が経ち今伝えたいこととして、10年という時が経ったとはいえ、それでもまだ元の生活に戻れない方々がいるということです。東日本大震災で学んだことは、たくさんあります。いつ起こるかわからないのが災害です。万が一に向けての対策や避難先の確認などの日頃の準備、そして経験者の言葉はその地域の教訓です。貴重な情報として正しく伝えていくことで助けられる命に繋がってくれることを願い、共に考えていきたいと思います。

社会福祉学科　教授　米村　美奈

災害発生で日常生活は、瞬時に危機状態に陥ります。警察や救急隊、自衛隊が過酷な場から住民の命を救い、医療職が延命に力を注ぐ映像等の報道を目にしてきました。そして、救われた命を福祉分野の我々がバトンを受け取り、生活支援を行います。

10年が経った今でも様々な形で被災地の災害支援は、続いています。

東日本大震災の翌年から福祉系の５大学を中心に実施された「ソーシャルワーカーの声プロジェクト」に淑徳大学の学生と教員が参加してきました。この活動は、被災地である宮城、福島、岩手県のソーシャルワーカーが災害支援時に果たした役割をその卵である社会福祉学科の学生がインタビュー調査によって明らかにし、さらにはソーシャルワーカーの必要性を社会に発信することを目指しました。

ソーシャルワーカーの生の声に触れた学生の一人は「生き残った人々の命を静かに守っている」と感じとり、教科書に出てこない事実の数々を発見していきました。

このような学生と教員の発見や現地のソーシャルワーカー（社会福祉士会）の知見を集約し、研究を重ねた集大成として、他大学と共同で『災害ソーシャルワークの可能性　学生と教師が被災地でみつけたソーシャルワークの魅力』を2017年に発刊いたしました。書籍にまとめた被災地での学びが今後も広く活用され続けることを願います。

令和２年度
淑徳大学地域支援ボランティアセンター活動報告書
東日本大震災復興10年TOMOIKI企画 報告書
～できることをいまここから～

淑徳大学地域支援ボランティアセンター
〒260-8701　千葉県千葉市中央区大巌寺町200
TEL. 043-265-7331（代表）　FAX. 043-265-8310（代表）

SHUKUTOKU